

御給仕て召上る方がいゝの。

「あらいやだ。」とおとやさんは又顔を赤くして袖を口にやつた。石橋の方でさういふのなら一緒に食つてもいい。」

「ちやあさうなさいました。」とお京は急がしさうに出て行つた。

「お筆さんはどうしたい。」と余はおとやさんに聞いて見た。おとやさんはませつくれた笑ひやうをして、

「どうなすつたか。昨夕からまだお歸りになりませんわ。」

「へえ、まだ歸らないのかい。何處に泊つてゐるのだらう。」

「深川でせう。」

「深川といふのは。」と余はしらばくれて聞いて見た。

「御存知の辨に。待合ですわ。」

「一人てかい。」

「どうか知らないわ。」とおとやさんは自分の事のやうに赤面し乍ら歸つて行つた。

剛三の部屋に行つて見ると例の如く剛三は床前に胡坐を掻いて堂々として控へて居ると例の豪傑笑ひをする仲間が孰れも亂雑に座を占めて相變らず碁盤を取出してゐた。けれども今は一局終つたところらしく一人の客は碁盤の上に腕を突いて石を手まさぐり乍ら這入つて行つた余を見て例の通り挨拶をせうともしなかつた。

「そんなに威張つて大きくなつてゐては御馳走が出せないわ。少し小さくなつて頂戴。」とお京はお膳を持つて突立つた儘大きな聲を出すと、

「小さくなれば驚いたねえ。」と寝をべつてゐた一人が先づ體を

起して坐つた。

「上野さんあなた其碁盤を片付けて下さいな。」

「ハイ。」と例の碁盤に凭れてゐた客は命令の儘に其碁盤を座敷の隅に持つて行つた。

「さあ貴方も少し小さくなつて。」と剛三を後へ退させ、此處へ貴方がたお二人がゐらつしやるといふわ。」と人の後ろの方に相變らず威儀を正して坐つてゐた洪さんと余との席を其横に作つて呉れた。

めいゝの前に膳が据ゑられて、銚子も運ばれた。

「お京さん、もう始めてもよからうな。」と客の一人は戯談の様
言つて盃をあげた。

「はあよろしい。」とお京は澄まして答へた。

「洪さんは日本料理と朝鮮料理とどちらがいいかな。」

「どちらとも申されません。どちらでも御馳走のある方が結構でございます。藝者でも妓生でも別嬪の方がいゝのと同様でございます。」

「ハ、ハ、ハ、と席上の人は皆笑つた。今迄隅々にゐて有るか無きか判らなかつたやうな洪さんが俄に談話の中心になつた。

「洪さんの熱くなつてゐた藝者は何とかいふ名だつたな。」

洪さんはニタ／＼笑つてゐて答へなかつた。

「あいつが今訪ねてゐる來たら所謂左夫人の尊號を奉らねばならぬ位の義理合はある人だらう。どうだな洪さん。」

「もう昨年ですか亡くなつたとかいふ事でございますから尊號を奉るにしても追贈の方でございますな。」と洪さんの眼中に相

手の男などは無いやうな口吻であつた。

二十五

景福宮は大院君が民の膏血を搾つて再建した宮殿だといふ事であるが今は廢宮となつてしまつて主要なる殿堂の外は殆ど荒廢するに任してあつた。唯だ其中の慶會樓といふ建物だけは多人数の集會場として適當な爲めに今も屢々官民の懇親會場として重寶がられてゐた。今日も式場は此樓上に設けられてゐて樓下には妓生の舞踊場を作り其周圍に深山の椅子を並べてゐた。余が友人と到着した時は抛球戯と稱する踊が始まつてゐて多くの人は之を取り圍んで見てゐた。椅子に腰を掛けてゐるのは主



として今日の主賓たる實業團の人で其の他に金筋や軍服の官職の人が多かつた。平の會員は其の椅子の後ろに立ち並んで人の肩の上から辛うじて首を突き出してゐるものも少くは無かつた。實業團の中に三四人の夫人が交つてゐる爲めに婦人の來會者も少くは無かつた。余は妻が二列目の椅子に腰を掛けて金成龍夫人初め四五人の婦人の中に小さくなつてゐるのを見出した。同

時に妻の方も余を見附けたものらしく一寸首を下て會釋した。

余は妻を見附けた眼で間も無く素淡をも見附けた。素淡は抛球戲の中に交つてはゐなかつたが、樓の傍に幕うち廻はして其處を妓生や樂人等の樂屋としてゐる處から出て來て長鼓を打つてゐる或老樂人に何か耳打ちして又もとの樂屋の中へ歸つて行つた。其服装は多くの妓生が天冠のやうなものを被り、五彩の色どり美しく長い袖の上衣を着て居るのに反して一昨夜彼の家に在つて着てゐたやうな純白の上衣に裳の色も目立たぬ淋しい色であつた。今此の色氣を抜きにした、いかにも老妓らしく周旋顔な彼女を見て、妓生組合の副取締を遣つてゐて多くの妓生からは姉さん株として取扱はれつゝあるといふ洪さんの話が思ひ出された。

間も無く妻は其席を立つのが見えた。余も樓の外に出て、妻の來るのを待ち合せ、二人で池の畔を散歩した。眞四角な池には蓮の葉が浮いてゐて、水を抜いてゐる苔もあつた。妓生の踊は見ずに此邊を散歩してゐる朝鮮人や軍人も多かつた。二人は並んで歩き乍ら斯んな話をした。

「さつき電話で何か妙な事を言つたね。」

「だつて毎晩お歸りが遅いつていふぢやありませんか。」

「誰からそんな事を聞いた。」

「だつて。」

「其處で余は隠さずに一部始終を話した。」

「まあお筆さんといふ人は随分な人ね。」と妻は下すむやうに言つたきりて、其上を追求せうともしなかつた。

「お前の方はどうだ。又いろんな人に逢つたか。」

「え、お房さんは熱心に案内してくれるんですけど、私ももう大分草臥れちゃつたわ。」

「いゝ加減で歸つたらよからう。」

「今夜は又四五人の奥さん方の會合があるんで、私も到頭行かないやならん事になつたの。明日は歸りますわ。」

池を一巡して慶會樓に歸つて見ると、また抛球戲は悠々として演ぜられつゝあつた。もう人の心は大分倦んで早く儀式の始まらんことを望んでゐるやうであつたが、まだ團長に當る或實業家の顔が見えぬ爲めに其運びにならぬのだと或人の話してゐるのが聞こえた。ふと見ると素淡は例の服裝の儘で樂人の傍に立つ

て同じやうな服裝をした二三人の妓生と共に抛球戲を見てゐた。さうして演戲しつゝある一人の妓生が極めて不器用に球を投げて其れを落したのを見た時、口に手を當てすこし腰を曲めて笑ひつゝ後ろを振り返つた。其拍子にふと余の視線と合つて、はたと余を凝視した。余は

「あれが素淡だ。」と妻に教へた。妻は極めて冷やかな眼を以て其素淡の頭の尖から足の尖迄を見て、

「いゝ女だわ。」と言つた。

「金成植は來てゐないか。」

「いらしつた筈なんです、まだ見當りませんわ。」

「何か金成植と素淡との關係に就いて聞きはしなかつたかい。」

「あの女が關係があるんですか。」

「さうらしいんだ。」と言つて一昨夜見聞した事實を話した。
「まあさうですか。あの妓生ですか。」と彼女は萬事釋然とした
やうな顔附をした。

八〇二

抛球戯に飽いたので余と妻とは澤山の模擬店の出来てゐる松原を散歩した。其模擬店は日本人の店が過半であつたが朝鮮人の店も多かつた。朝鮮人の店には男の朝鮮人が客を呼んでゐたが日本人の店は大方藝者が赤い襷を掛けて黄色い聲を出してゐた。ところが其日本人側の或ビール店に同じく赤い襷を掛けてビールを客に強ひつゝあるのは疑ふ方なきお筆であつた。お筆は何が故に彼のビール店などに立て客を呼つゝあるのであらう。先刻一寸剛三の部屋の入口で逢つたかと思ふと早くも此處で模擬店の女に化けてゐるに至つては驚かざるを得なかつた。其時

一大音響が耳元に起つて場中の人一同の心を其方に牽き附けた。其れは爆竹の響で式場の開會の合圖であつた。池の畔の草の上に赤い火の玉が走つては黄色い煙を立て後れた一二發の音で其響は静まつた。人々は皆慶會樓の樓上に登りつゝあるので我等も亦其方に歩みを返した。妻はお筆に氣がつかぬらしかつたので余も黙つてゐた。

慶會樓上の式場は殆ど人を以て埋められて居た。會員は立食の卓に着き乍ら主客の交換演説を聞くのであつた。余等は後れて上つた爲め片隅の卓に漸くありついたので中央の卓上に交換されつゝある演説は雜然たる物音に妨げられて殆ど聞取れなかつた。唯頭の禿げた一人の老紳士が椅子の上に突立つてゐるの

九〇二

だけが眼に入つた。其は京城の民團長だと友人によつて教へられた。其の演説は存外永かつた。けれども冷肉を争ひ食ふ方が急がしくつて其を聞いてゐるものは殆ど無さうであつた。

ふと見ると民團長の禿頭はいつの間にかもう見えなくなつてしまつて顔の大きい色の黒い少し背の曲んだ老紳士が又椅子の上突立て口を動してゐた。民團長の演説は時々語尾だけが聞こえてゐたが此人の演説は徹頭徹尾聞こえなかつた。

「あれは？」と余は傍の人に聞いた。

「實業團長の上林です。」と傍の人は答へた。

「あれが上林ですか。」と余は兼々名許り聞いてゐた有名な男を遠目ながらに凝視した。一見たゞの隠居さんのやうに見えたがよく見て居るうちに何處やら利かぬ氣の肝癢持ちらしい眉根を寄

せたり延ばしたりしてゐた。

「何でも今日の演説で、近頃内地の新聞で喧しい總督政治攻撃に就いて意見を陳べるやうに聞いてゐました。今其演説を遣つてゐるのでは無いでせうか。」と傍の人は言つた。果たして其うち割れるやうな拍手が聞こえた。もう濟んだのかと思つたら演説は尙ほ續けられつゝあつた。

「あ、黒木が来てゐますよ。」と傍の人は余に叫びかけた。見ると一人の軍人が拍車の着いた長靴を穿いて手に鞭を持つてゐるのが飛出たやうな目をむいて大きな口を動かして一人のフロツクの男と何か頻りに話してゐた。其は食卓を離れた窓際で、其邊には人も稀れに全體が薄暗い式場の中に比較的明るく光線がさし込めてゐた。あの軍人が有名な黒木少將かと余はナイフの手を留め

て其方を見た。

「今日は何か事があるかも知れませんが。」と傍の人は好奇の眼を睜つて少將の行動を注視しつつ、

「又た總督政治反對の人等が今日をいゝ機會にして何か喋らうといふのでは無いか。」と苦々しさうに言つた。拍手は頻りに起つて上林の演説はまだ續いてゐた。黒木少將は演説にも拍手にも全く無頓着で、極めて難かしい顔をし乍ら片手に鞭を打振り打振りフロックと話を續けてゐた。會員は食つてしまへばもう用は濟んだといふやうな顔をして階下に降りて行くものといつ迄も意地汚く食卓にかちりついて葡萄酒ビール三鞭とありたけの酒をあふつてゐるものがあつた。

余は黒木少將と上林とを二個の中心として其邊に漂ふ空気に

意を留めて見た。黒木少將は相變らず拍車の着た長靴に床を踏み鳴らしながら鞭をうち振りうち振り大きな口を開けて話してゐた。フロックはいつの間にか見えなくなつてゐて相手の人はもう屢々變つたけれども少將は殆ど同じ所に突立つたまま、颯爽たる意氣を示して場内を睨してゐた。若し少將が一度彼の鞭を揚ぐれば思はぬところから伏兵が起つて急ち我等を包圍してしまふのかも知れぬといふやうな芝居めいた空想にも驅られるのであつた。

上林の演説は尙ほ多くの拍手を麻ち得つゝあつたが聞えぬのはもとの通りで少數の人の外は大概倦み疲れてぞろぞろと動搖を始めつゝあつた。其處へのそくと階段を登つて來のは剛三であつた。五つ紋の羽織に袴を着けてゐる彼は微笑を含み乍ら

一寸場内を見廻してゐたが、誰か知る人を見附けたらしく、其方
歩を進めた。黒木少將の傍を通る時、彼は一寸帽子に手を掛けた
が、少將も軽く擧手の禮をした。

妻は余等の傍を離れて二三の婦人連と何事か話し合つてゐた。
僅か数日のうちに大分知己が出来たらしく、又其應持振りなども
稍々もの馴れて見えた。

盛な拍手が起つて上林の演説は漸く終りとなつた。上林の長
い演説は實業家の立場からして總督政治を謳歌し、寧ろ内地新聞
の無益な攻撃を辯駁する意味のものであつて、而も聲の底い活氣
の無い長い演説であつたが爲めに人は皆内地新聞の意見を代表
する活氣のある反對演説を待設けてゐた。

けれども此は無益の待設けてあつた。續いて立つたのは朝鮮

華族の某氏で、其は實業團の來鮮を鮮人一同を代表して歡迎する
意を述べ、同時に上林の言に同じて總督政治を謳歌するものであ
つた。惰氣は場内に瀰満して會員の過半は階下に下り止を得ず
場内に留まつてゐる人も其を聞いてゐるものは無かつた。黒木
少將もいつの間にか影を穩くし、剛三も二三人の人と談笑し乍ら
場外に去つた。唯其演説を通譯するのが洪さんであつた事が余
に取つては一つの興味であつて、例の古びたフロック姿を直立さ
せて明晰な日本語を抑揚ある演説口調で音吐朗朗と陳べるとこ
ろは余等を圓融社などに案内した事に比ぶれば遙に意を得た事
であらうとは思はれたが、何分原の演説が愚劣な爲めに少しも引
立たぬので氣の毒であつた。

「松林の摸擬店は最前とは違つて大變な混雜であつた。到る處の店に客が充滿してゐたが、其でもめい／＼自分の店に尙ほ客を引かうとして藝者どもは黄色い聲をふりしぼり出來るだけの愛嬌を振り蒔いてゐた。彼のお筆の店はと見ると或一つの大きな松を背にして、「アサヒ」サツポロ等の文字を白く抜いた赤や青の小さい旗が澤山に翻つた葎簀茶屋の軒が見える許りて、フロックや紋附の人垣で取圍まれてゐた。朝鮮人の店は自から朝鮮人許りが集まつて頻りに日本人の客を呼んでゐるけれども大方躊躇して這入るものは無かつた。唯其店の色彩はさつき餘興場に居た妓生が矢張り人込みにもまれ乍ら首を突込んでゐること、其氷色の上衣や裳は人の目を牽いた。又一隊の妓生はさきに余等夫婦の一廻した蓮池の塘を二三人宛手を引いて漫歩し、老樂人は

塘の角の石の上に長鼓や其他の樂器の包みを下ろしてめい／＼長い煙管を啣はへてゐた。遠くから見ると古い畫卷に見る畫の如く、其上池塘に峙つてゐる慶會樓の丹碧の建物も矢張り其老樂人等にふさはしく今の代のものとは思はれぬやうな感じてあつた。

「あれが黒木少將の馬だらう。」と一人の男はとある松の木の間を指して人と話してゐた。其邊には人立が少く一匹の軍馬は手綱を双方の松の樹に長く縛られて前脚をあがいては土を掘つてゐた。

妻は金夫人等に導かれて或る摸擬店の前にゐた。

「石橋はどうしたかな。」と余は其邊を見廻したが、とある鮮店の前に手に鮓を摘まみ乍ら人を相手に哄笑してゐた。

剛三は余の近づくのを見て、

「君は閔妃事件の跡を見たか。」と聞いた。

「僕はまだ見ない。」と答へた。

「ぢやあ教へて遣らう。」と言ひ棄て、先に立つた。

二人はお筆の店の前を通つたがまだ客が満員で、其の姿すら見ることが出来無かつた。剛三は其處にお筆のゐることは知らぬらしく、大きなステッキを打振り、其店の方を振り返りもせず過ぎた。

松原を出て荒廢した數多の宮殿の跡を通り過ぎ、殆ど後ろの山に取りかゝらうとするあたりに、又一つの池があつて、其池の後ろに同じく宮殿のあとと思はる處があつた。剛三は其處に立ちどまつて、

「此處だ。」と言つた。四邊には我等二人の外に人影が見えず、後ろの小松山には靜に風の渡る音が聞こえて、悽愴の氣が自ら人を襲ふた。

剛三は其廢墟のあとに立つて、當年の歴史を話した。風が渡つて池上に立つ漣が透明な水の面に不透明な皺を作るのを面白く見乍ら余等は其話を聞いた。剛三は一つの石の上に腰を下ろして、興亡の跡夢の如し、といふが全くだね。後から見ると兒戯に類したと思ふ事が當年の人々に取つては命掛けの仕事の事もあるし、當年の人に取つてはほんの朝飯前の仕事であつた事が後から見て青史に録すべき大事業の事もある。閔妃事件の如きはどちらに屬する方か知らぬが、斯うやつて此舊蹟に来て見て追想すると、一種の悲劇とも考へらるれば、又一種の滑稽劇とも考へられる。

此頃黒木等の遣つてゐることも僕等から見ると馬鹿氣切つてゐるやうに思はれるけれども後年になつて見たらあれで相當の仕事を遣つたことになるのかも知れぬ。個人の利害得失を忘れて考へて見ると世の中といふものは面白いもので敵とか味方とかいふのも剛でも引て假りに役割を定めてゐるやうなものだ。黒木と僕などは随分いゝがみ合つてゐるが斯くの如くして文明の進歩といはうか、國權の伸長といはうか、何等かさう言つた或目的の上には共に微力を盡くしてゐることになる。いはゞ國家とか文明とかいふ巨人は澤山の個人を犠牲にして其進むべき道に進みつゝあるのであつて個人は自己の名譽とか職責とか疝癥とか敵愾心とかいふものに支配されて一生懸命になつてゐるが、月日が経つて見れば何の事は無い或運命の糸に操られてめいゝ割當て

られた役を遣つたに過ぎぬ。少し佛者の悟めくが斯ういふ舊蹟といふやうな所に來ると僕はいつてもさういふ感じを起す。文學者にはそんな感じは無いか。

「無いどころでは無い、僕等は舊蹟に來るを待たず人間の現實的の争鬭にも全く同じ感じを起し、自分自身をも客觀視して敵味方の區別が無くなつてしまふ事が多い。其爲め政治家のやうな執念深い喧嘩は思ひもよらぬ。君等のやうな人にはそんな感じは毫末も無いものかと思つてゐたが、今君の説を聞いて頗る意外の感起こさざるを得ぬ。唯恐れるのはそんな感じを起すやうになつたのは石橋君の老境に入つたことを證據立てるのでは無いかな。」

「ハ、ハ、ハ、ハ。」と剛三は笑つた。其時又た爆竹の音が聞こえた。

式場は愈々閉ぢられたと見えた。

剛三は立上つて、

「どうだ、もう少しは俄鬼共が退散したかも知れぬ。ビールでも飲まうか。」と足を返した。

松林の模擬店はまだなか／＼に賑うてゐた。お筆のビール店には先程では無いけれどもまた相當に人がゐた。

「馬鹿野郎が、また物好きに下らぬ真似をしてゐやあがる。」と剛三は笑つた。其時模擬店の中から現はれた一人のフロックの男が、いきなり剛三に向つて、

「石橋さん、今日はお筆さんが大活動を遣つてくれました。」と言つて感謝した。

「又た出娑婆つて却つて御迷惑だつたらう。」と剛三は笑つた。

「貴方がたも今日は此店のお客様よ。」と二人にコップを渡してお筆は酌をした。見ると流る汗を袖で拭いては後れ毛を搔上げ、戦場を経て來た勇士のやうな快活さを其美しくい顔に現はしてゐた。

フロックの主人は再び剛三に向つて、

「今日はお筆さんのお蔭で私の店が一番の繁昌でした。」と感謝の意を致した。

「いゝのよ、そんなに改まつて挨拶なんかしなくつても……あそこに見えるのは洪さんぢやなくつて。一寸洪さん貴方召上れな。」とコップを突出して呼んだ。洪さんは例のフロック姿を直立させてのそり／＼と此方に歩みつゝあつたが、口許の皺に微笑を湛へて近よつて來た。

「早く入らつしやいな。私貴方に思ひざしよ。」とお筆はコップを洪さんの胸許に突附けるやうにした。

「さうでございますか。」と洪さんは慇懃に其コップを受けて、
「もう澤山でございます。」と両手で其をさく上げるやうにした。

「厭やな洪さんねえ、そんなに上げてしまつては注げ無いぢやありませんか。」とお筆は眉間に美くしい皺をよせて両肩を揺つて見せた。

「お筆さんは大變御精が出ますね。今日はビール店の女將で入らつしやいますか。」と洪さんは皮肉な口許に深い皺をよせて言つた。

「今日は私の臨時の細君になつて戴いたやうな譯でして、いやもう細君一人の活動で店が繁昌致します。」とフロックの主人は頭



に手を遣つて商賣人らしい愛嬌を言つた。

「今日はビール店の女將で、明日は何になるんでせう。」とお筆は氣輕に笑ひ乍ら其處に立寄つた五人連の客に一々コップを突つけて、

「召上れな。」と嬌かしい唯一言で直ちに其人々を虜にしてしまつた。其處へ又手を引連れて遣つて來たのは一群の妓生で其中に素淡が交つてゐた。

「素淡が来たよ。」と余は剛三に注意した。

「お、素淡が来たね。一杯飲ませて遣らう。洪さん呼べ。」と剛三は命令した。洪さんは朝鮮語で何とか言つたが、妓生等は尙ほ手を引合つて笑つてゐる許りて近よつて来なかつた。

「お筆さんがあるのて極りが悪いのでございませう。」と洪さんは戯談のように言つた。

「厭な妓生だわねえ。さあ入らつしやいな。チャブソ、シヲ。」とお筆は妓生達を手招きしてコップを出した。

「コ、マブソ。」と素淡は先に立て近よつて来て其のコップを受けた。さうして女同志は何處でもするやうに初めて顔を合せた時お筆と素淡とは互に他の顔をじろじろと見た。其後ろを斬髪して中折を被り服は朝鮮服を着てゐる二人連れが此方を見るて

も無く唯無意味に通つた。

「あの右手の方が金成植でございます。」と洪さんは目送し乍ら余等に教へ、又た素淡の肩を叩いて何とか言つた。素淡は知らぬ振りとして、朋輩の妓生からピンヘットを徴發して其を吸つた。

其は平凡な光景であつたけれどもお筆と素淡とを並べて見るところに少なからぬ興味を覺えた。お筆は手眞似と目色で素淡にピールを強ひたが、素淡も手つきと目色で其を辭した。お筆の黒い大きな瞳と素淡の單臉の彫物のやうな眼とは互に其有する力の凡てを投げ合つて其處に重疊たる波瀾の形作りつゝあるやうに余の眼には見えた。さうで無くてもお筆の大きな瞳は最前から其不斷の活動のひまびまに尙ほありつたけの意味を他の心に注ぎ込まうとしつゝあつた。此時ふと見ると彼方の松蔭に金

夫人等の一團に交つて淋しげにイみつゝ、此方を見てゐるのは余が妻であつた。

八二二

余は再び妻と二人で人の居らぬ方を散歩する機会を作つた。

「お筆には泉屋で逢つた許りてまだろくに話をした事も無いだらう。まだ店にゐるだらうから一緒に行つて見やうぢや無いか。」と言つて見たが妻は、

「お鮓かお汁粉なら食べに行つてもいいけれど、お酒はもう澤山。」と言つて承知しなかつた。さうして今夜は素淡の家ですか。お筆さんと一緒ですか。」と戯談らしく言つた。

「二日ある事は三日あるといふが、今夜剛三は東大門外の尼寺に行つて月を見やうといふので、僕と洪さんとお筆とが一緒に行く

事になつたのだ。お前も行く氣があるならば一緒に行つて見てはどうか。」と勧めて見た。

「え、行つて見度くもありませんが、さつき話したやうな譯ですか。今夜はよしませう。あとで又お話を聞きますわ。」と淋しく言つた。

二十六

余とお筆とは洪さんの案内で十七夜の稍々缺けた月を東大門の壁上に眺め乍ら電車で清涼里へと志した。剛三は所用がある爲めに一足遅く後から行くとの事であつた。

東大門を出て清涼里に着く迄の路は並木の如く植ゑられた左

九二二

右の楊柳が風を受けて泳ぐやうに動き、其楊柳の下を流るる清水は底の石の敷へられるかと思はるる許りに月の光を受けて輝いてゐた。

「螢のゐさうな所だが居無いか。」と余は其水の上を見た。

「あそこにあるわ兄さん。」とお筆は楊の間を指して言つた。見ると月の明るさの爲めに螢は其光を失つてゐた。

「暗夜に來ますと此邊は螢の美しくい處でございます。」と洪さんは言つた。余は京城を出る一步で斯る趣のある景に接しやうとは豫期しなかつたので左右の景を送迎し乍ら電車の遅いのも氣にならずにゐた。

「あそこが此度の京元線の停車場になる處でございますから愈々開通しましたら清涼里は立派なところになります。」と月の明

りに透かして洪さんは右手の切り開かれた低い岡のやうな處を指して言つた。いつかもう終點に達して余等三人は降り立つた。

「其處に二三軒茶店のやうなものがあつた。いづれも朝鮮人の家らしいと思ひ乍ら近よつて見ると其うちの軒は「うどんそばビール、正宗」などと怪しげな文字の張り紙がしてある日本人の茶店であつた。

「暫く來無いうちにもう日本人の茶店が出來て居ります。」と洪さんは言つた。よく見ると其茶店には已に二三人の日本人が這入つてゐるらしく背の低い日本の女が店前に立つて我等を呼んだ。

「大分喉が渇く茶でも飲んで行かう。」と余は先に立つて其店に這入つた。先客の三人は一つの粗末なテーブルを取圍んで饅頭

を食ひつゝあつたが余は別に其方に氣を留めず別のテーブルの
前に腰を下ろした。其時横合から、

「先生ではありませんか。」と其の三人のうちの一人が聲を掛け
續いて又

「あ、お筆さんですね。」とお筆を見て言つた。見ると其は意外に
も慶之助であつた。

「や、君か。」と余は其變つた風態を眺めた。彼は白足袋の上に草
鞋を穿いて、脚絆も穿かぬ素足を丸出しにして尻をからげてゐた。
他の二人も似寄つた風態であつた。

「何處に行らつしやるの？」とお筆は突立つたまゝ不思議さうに
眼を瞪つた。

「今日は大變な目に逢ひました。あの春尾緑水の死骸について

來たんです。」

「まア厭だ。」とお筆は四邊を見廻して、

「到頭いけなかつたんですか。」

「今朝十時頃に息を引取りました。病院に長く死骸を置く譯に
も行かず死骸を引取つて歸る家も無し、止むを得ず火葬場に持つ
て行つたところまだ二十四時間経過しないからと言つて受取つ
て呉れずいろ／＼騒いだ結果、この男が知り合ひなのを幸に清涼
里の尼寺で預つて貰ふことになりました。」と連の一人を指して
言つた。

「それではこれから尼寺迄行く所なの？」

「さうです。棺は先にかつがせて遣りました。此處迄ついて來
たのですが、腹が空いたので一寸本店に立寄り、これから又追ひ附

く積りてす。

「僕等も清涼里の尼寺に行つて月見をする事になつてゐるのだが驚いたね死骸と一緒に月見は。」

「怖いわねえ。」とお筆は戦慄した。

「尼寺と申しましても三刺許りありますから其お寺に行かなくても宜しうございます。」と洪さんは口を挿んだ。

「少し急ぎますから其では又向ふてお目にかゝります。」と慶之助は何となく落付かぬ風に挨拶して他の二人と共に先に立つて出て行つた。お筆は其尻からげの不思議な後ろ姿を見送つた。

一匹の螢は月の光を逃れたやうに此小さい板屋の中に吹き込まれ家のうちを高く低く柔かい曲線を描いて飛んでゐたが、やがて又た外に出てしまつた。

洪さんは慶之助と余等との邂逅を不思議さうに傍観してゐたが何とも言はなかつた。

「何て嫌なんぞでせう。幾ら隣りのお寺でも死骸が置いてあると思ふとお月見なんかする氣にはなれないわ。」とお筆は暫く黙つてゐた後ち嘆息するやうに言つた。さうして慶之助の事に就ては何とも言はなかつた。

「段々遅くなりますから出掛けやうではございませぬか。」と洪さんは促した。

「表に出た。月は廣い道を照らして大分往手迄見る事が出来たが他に人影は見えなかつた。余は柩を追うて慌だしく歩いて行く尻からげの男を想像して見た。」

洪さんは案内者として先に立つて歩いたがお筆は稍々ともす

ると後れようとした。さうして、

「兄さん、さう早く行つては厭よ。」と小走に追ひついては余により添て歩いた。

「まだ大分ありますか。」

「もう其處を左へ曲ると間も無くてございます。」と洪さんは答へた。

其左へ廻つた道は一層廣々とした大道であつた。

「これが閔妃の墓へ行く道でございます。尤も今は他へ移されましたから遺骸はもう此處に無いのでございます。」と洪さんは説明した。矢張り楊柳が左右に茂つて廣い道の半分許りは夏草が生茂り、早や秋の虫と思はるゝやうな虫が鳴いてゐた。

「もう歸り度くなつたわ。」とお筆は殆ど余の手を握らん許りに

寄り添ふた。

「其處を右の小道に這入りますともう屋根が見える位でございます。」と洪さんは振り返つて言つた。さうして余とお筆との寄り添うてゐるのを見て口許の皺に微笑を湛へたが何とも言はなかつた。

余は此のお筆の馴れくしい態度にも昨夜程は煩はされなかつた。其は傍に洪さんがゐるといふ事も一つの頼みではあつたが其よりもやがて後から来る筈の剛三を今夜の主人公としてゐるといふ事を力強く思つた。

やがて其小路を右折すると其處は爪尖上りになつてゐて段々畑の間にぼつくと人家もあつた。

「これが純粹の朝鮮の百姓家でございます。」と洪さんは言つた。

大邱あたりで見た家と格別變つてゐるやうにも思はれなかつたが其邊の光景がいかに山家らしい趣があつた。半町も其小路を行つたと思ふ頃道傍に四角なものを下ろして其處に二三人の人が立つてゐた。若しやと思ひ乍ら近よつて見ると果たして其は慶之助の一行で道傍に下ろされたものは柩であつた。柩には白い布が掛けてある許りて他に何の蔽物も無つた。お筆は遂に余の手を固く握て息を殺して立留つた。

「どうしたのです。」と余は聞いた。

「大分卑き廻つたので、チゲが草臥れましたね。」と慶之助は淋しく笑つて「どうかお先へ入らしつて下さい。」と道譲つた。

目のあたりに柩を見てからは、お筆許りで無く余もあまりいゝ心持にはなれなかつた。暫く行つてから後を振り返つて見ると

彼等は今漸く歩き始めるらしい容子に見えた。

「もう其處でございます。」と洪さんは勢ひをつけるやうに言つた。小路は自ら余等を導いて一つの家の前に出た。其處が寺かと思つたら其は清涼亭といふ朝鮮料理屋であつた。

「此處でビールでも飲んでゐながら石橋さんを待合せてはどうでございませう。寺はもう直ぐ其處でございますから。」と洪さんは其處の縁に腰を下ろした。余もお筆も並んで腰を下ろした。

清涼亭の主人であらう天神様のやうな帽子を被り髭を生やした男が出て来て腰を曲めた。寺に行けば精進料理許りであらうから此處で序に飯でも焚かして食つてはどうだらうといふ洪さんの意見に従つて三人で上に上つた。さうして剛三の來ること

を話して一人の男に立番をさせる事にした。何をするか判らぬやうな男がぐわくと澤山にゐたが其中の一人が命を聞いて表に出て行つた。子供の泣き聲が聞こえると思ふと其を叱る母親の濁つた聲と打ち叩く掌の音も惨酷に聞こえた。

「どんないゝ處かと思つたら随分汚いところねえ。」とお筆はあたりを見廻した。我等の上つたところは一間半許りの濶突て其隣の間は日本風を折衷した八疊敷位の部屋であつた。窓から表を見て居ると程なく慶之助一行が柵を取り圍んで過ぎるのが月明りに見えた。洪さんは彼等がどの寺に行くかを見て来るやうに亭の主人に命じた。例のぐわくと澤山にゐる男の一人が又其あとについて行つた。

「石橋は此處に料理屋のある事を知つてゐるのですか。」

「御存知でございますとも、この前御一緒に來たこともございます。」

清涼里がどういふ所であるといふ事を知らなかつた時は一足後れて剛三の來るといふ事は殆ど普通の事として何の疑を挿む餘地も無かつた。併し實際來て見ると電車の終點から此處迄は可成の道程がある。其に我等と慶之助の一行の外朝鮮人の通るのにすら出逢はなかつた。剛三の事であるから一人月下にステッキをついて堂々と遣つて來無いても限らぬがたゞ何となく其は不慥な事のやうに思はれた。

三人は運ばれた神仙爐に箸を突込んでビールを飲んだ。昨夜の怪しげな家を怖いとも氣味が悪いとも思はなかつたお筆も今夜の此家には何となく落着かぬらしくいつもの通り汗をかくし

た容子を見ることが出来無かつた。

「どうだ少し飲みたまへ。」と余は酌をした。

「石橋の兄さんはどうしたんでせう。遅いぢやありませんか。」とお筆は訴へるやうに言つた。其處へ柩について尼寺へ行つた男は歸つて来て何か洪さんに報告した。洪さんは余等に次の如く話した。

「あの方々は三つある寺の一番向ふのに行かれたさうでございます。其處が一番大きくて奇麗なのでございまして外に座敷もございしますが、どう致しませう。外の寺の方がよろしうございませうか。」

「外のお寺の方がいゝわねえ。」とお筆は泣くやうに言つた。
「餘り穢くさへ無ければ外の寺の方がよくは無いてせうか。」と



余もお筆の言葉に逆らは無かつた。洪さんの旨を奉じて其男は又寺の方へ行つた。

表に立つて剛三の來るのを見張つてゐる男は音沙汰も無かつた。洪さんも多少疑惑を抱き始めたらしく其處にあつた木杵を突掛けて例のフロック姿の長い體をとぼくと月下に運んで表に出て行つた。余は剛三の事を思ふよりも寧ろ此山里の今夜の

異つた光景に強く心を牽きつけられた。

其尼寺といふのはどの邊かはつきり判らぬが兎に角さきの男の往復の時間から考へて見ても遠くて無い事が判つた。旅役者の死骸が中有に迷うて同じ二三人の旅役者に護せられて其寺に一夜を過すといふ事も心の牽かるゝ出来事であるが男を男とも思はず世間を世間とも思はぬ莫連女も其一つの死骸を怖がつて何となく落着かぬ有様のあるのも亦た興味ある事のやうに思はれた。

いゝ月だ。だんぐと月が窓から射込んで来たね。」と余は其月影を見た。いつの間にか余の左肩やお筆の右の袂の上に明るい光が影を落としてゐた。

「本當にいゝ月だわねえ。けれども何だかしんぐとして心細

いやうな晩だわねえ。」とお筆は耳を澄ませた。何かの物音と思はれたのは洪さんが木杵を引ずつて歩く音であつた。此方に歸るのかと思つたら其音は少し宛遠のくやうであつた。

「心細いところもあらうけれど慶之助が餘り遠く離れてゐない寺にゐると思へば心丈夫なところもあるだらう。」と余は笑つて言つた。

「さうねえ其は幾らか心丈夫だわ。」とお筆は戯れるやうに言つて余の手を取り。

「其に兄さんもあなさるし……」と耳を澄ませて。

「あの音は何てせう。」

「何の音だらう。遠くの松山にても風の渡る音だらう。」

「あれは何の音？」

二人は覺えずハ、ハ、と笑つた。其は臺所と思はるゝ方に物を啜る様な音のしたことであつた。續いて又た女の濁つた聲で何か罵るやうな聲が聞こえ早口に囁るやうにいふ二三人の男の聲も聞こえた。亭主は食卓を運んで来て其上に神仙爐を載せた。此の天神尊を生やした亭主は突立つた儘何か言つたけれども洪さんを缺いた此席には全く通じなかつた。彼は無器用に腰を曲めてビールの瓶を覗き込み獨り合點したやうな顔附をして出て行つた。

六四二

間もなく洪さんは再び尼寺に行つた男と連立つて歸つて來た。石橋さんはどうなすつたんでございますか。影も見えんやうでございますが……と時計を出して見て

「もう九時が近いやうでございます。尼寺の方でも待つてゐるさうでございますから早く御飯でも食べて向ふへ行つて待つやうに致しませうか。」と分別ありげに言つた。

「尼寺はどれに極りました。」

「一番手前のに極めたさうでございます。」

「其ては死骸とは大分離れてゐるからお筆さんも怖いことは無いだらう。」と余は笑つた。

「いゝわ、もう私觀念したから何處へでも行くわ。石橋の兄さんなんか來なくつてもいい。其代り酔ひませうね。」と神仙爐に箸を突込んで銀杏の實をより出しより出して食つた。

亭主はビールの代りを持つて來た。だんく〜と深く指し込んで來る月影を浴び乍ら三人は卓を圍んで飲んだ。我國の王朝時

七四二

代の物語を讀むと京都の殿上人などの西山とか北山とかいふあたりにも偶々遊びに行つた時の記事などはいかにも物あはれに、
も見聞も知らぬ異郷に流寓したやうな心細さが叙してあるが、
其程では無くとも今宵の情景は何となく余の心をそつて其物
語の様を思ひ起させるのであつた。唐臼の音のごぼくと聞こ
ゆる代りに濁つた意味の判らぬ女の聲が聞こえた。

たに見張をさせて置いた男はいつ迄も音沙汰がなかつた。こ
つちから何とか言はぬ限りは明日の朝迄でも見張つてゐるので
あらうとをかしかつた。そんな事を話題にして笑つたりなどし
つゝ神仙爐が空しくなる迄三人共に飲んだ。其處へ亭主は暖か
さうに湯氣の立つてゐる飯を大きな鉢に入れて持つて來た。

料亭を出る迄剛三は終に來なかつた。表に出て見ると見張の
男は往來の中央にしゃがんで長い煙管を啣へてゐた。さうして
洪さんから白銅一個を貰つた時初めて立上つて頭を下げた。

其處から少し急な坂になつて半町迄も行かぬうちに片方は谷
になつてゐるやうな處に人家があつた。一見百姓家と餘り變ら
ぬ庵末な家であつたが洪さんは、

「此處でございます。」と言つて立止つた。余はこれが寺かと稍々
驚いて其低い軒と低い門とを見た。けれども朝鮮の寺は殆んど
料理屋も同じ様なもので兩班などは妓生を連れて泊りに行くの
だといふやうな話を聞いた事を思ひ出して或は濃艶な若い尼が
此門から出て來るのかも知れぬと半ば好奇心に驅られて待設け
てゐるとやがて門を外す音がして現はれたのは一見十二三の男

の子かと疑はるゝやうな頭は五分刈にした、白い衣服を着た、年とつた尼であつた。月の光によく見ると年とるに従つて小さくなつたといふやうな眼をシヨボ／＼させ乍ら、少し口を開けてぢつと我等を見乍ら何とか言つた。洪さんが簡單に其に答へると、其尼は我等に這入れといふやうな料をして見せた。

門内には二三坪許りの空地があつて其空地を隔てゝ一間半許りの狭い部屋が向ひ合つてあつた。老尼は先に立つて我等を其一つに導いた。

「こんなところですか。」と余は庭に立つた儘で其狭い部屋を覗き込んだ。

「私此寺は初めてでございますが併しどこでも大同小異でございます。」と洪さんは別に驚いたやうな風も無く落着いて言つた。

「私もう酔つちやつた。どこでもいゝわ早く臥みませうよ。」とお筆は晝間からの草臥が一時に出たらしく自分の體を持て餘したやうにどかと縁に腰を下ろして兩手に後れ毛をあげた。

お筆許りて無く余も大分酔つてゐた。もう月見どころの騒ぎで無く兎も角今夜を此處に過ごして明くるのを待つより外に途は無かつた。

「南京虫はゐないでせうか。」と余は上に上つてから其邊を見廻した。

「大丈夫でございますませう。」と洪さんは冷かに答へた。下は温突になつてゐたけれども何も焚いて無かつた。何か救くものは無いのかと聞くと其處に在る薄縁を敷くと老尼は答へた。さうして枕は木枕であつたが、其も素淡の宿の木枕とは違つて自然木の

切端の中を少し許り刳抜たものであつた。

「さういふ枕の割目などによく南京虫は居るものでございます。」
と洪さんは言つた。老尼は縁の下に大きな鉢のやうなものを置
いて其中に枯草を入れて火を附けた。濫突でも焚附るのかと思
つたらさうで無く蚊いぶしをするのであつた。老尼は團扇で其
煙を狭い室内に送り込むので呼吸をするのさへ苦い位であつた。
「驚いたわねえ私達を狐と間違へてるのだわ。」とお筆は情なさ
うに言つて表に面してゐる小さい窓の方へ逃げて行つた。
「おや鶴見さんぢやなくつて。」と其時お筆は窓から外を見乍ら
呼んだ。其に對する男の返事が聞こえて即ち門から這入つて來
たのは慶之助であつた。
一通りいぶしたあとで老尼は外の窓も縁側の障子も締めるや



うにと言つた。洪さんは老尼の
命令通り兩方を締めてしまつた。
慶之助も矢張り中に締込まれた
一人となつた。

「君の方はどうだ。」と同じ災難
に出逢つものが其容子を聞き合
ふやうな心持で余は聞いた。慶
之助は四邊を見廻はして、

「これは清潔でようございます。
私の方の寺は非常に穢い上に棺
を置いた傍に三人寝るのだから
大變ですよ。餘り苦しかつたか

ら貴方がたの處へ出掛けて行かうと思つて表を通り掛つたところでした。」と答へた。

「ぢやあ此方に泊つてくといゝわ。」とお筆は戯談のやうに言つて、

「けふ貴方芝居はどうしたの。」

「私は春尾の代りに遣つて居たゞけの事ですから、今日は他のものが代つて遣つてゐる筈です。」

「だつて貴方の外に役者らしい役者は無いぢや無いの。」

「戯談言つちやいけません。」と慶之助は心から恐縮したやうに言つた。

薬酒といはれてをる朝鮮酒を洪さんの命令によつて老居は持つて來た。其を又四人で飲んだ。

立籠められて蒸暑い室内に四人は唯酔ふ外に目的の無い人の様に飲んだ。先には殆んど眠りこけさうになつてゐたお筆は一しきり慶之助を捕へて艶かしい戯談を言ひ乍ら酒の味も知らぬやうに飲んだ。慶之助は又昨夜來の疲勞を此酒によつて回復せうとするらしく多く飲めぬ口にひつかけひつかけ飲んだ。

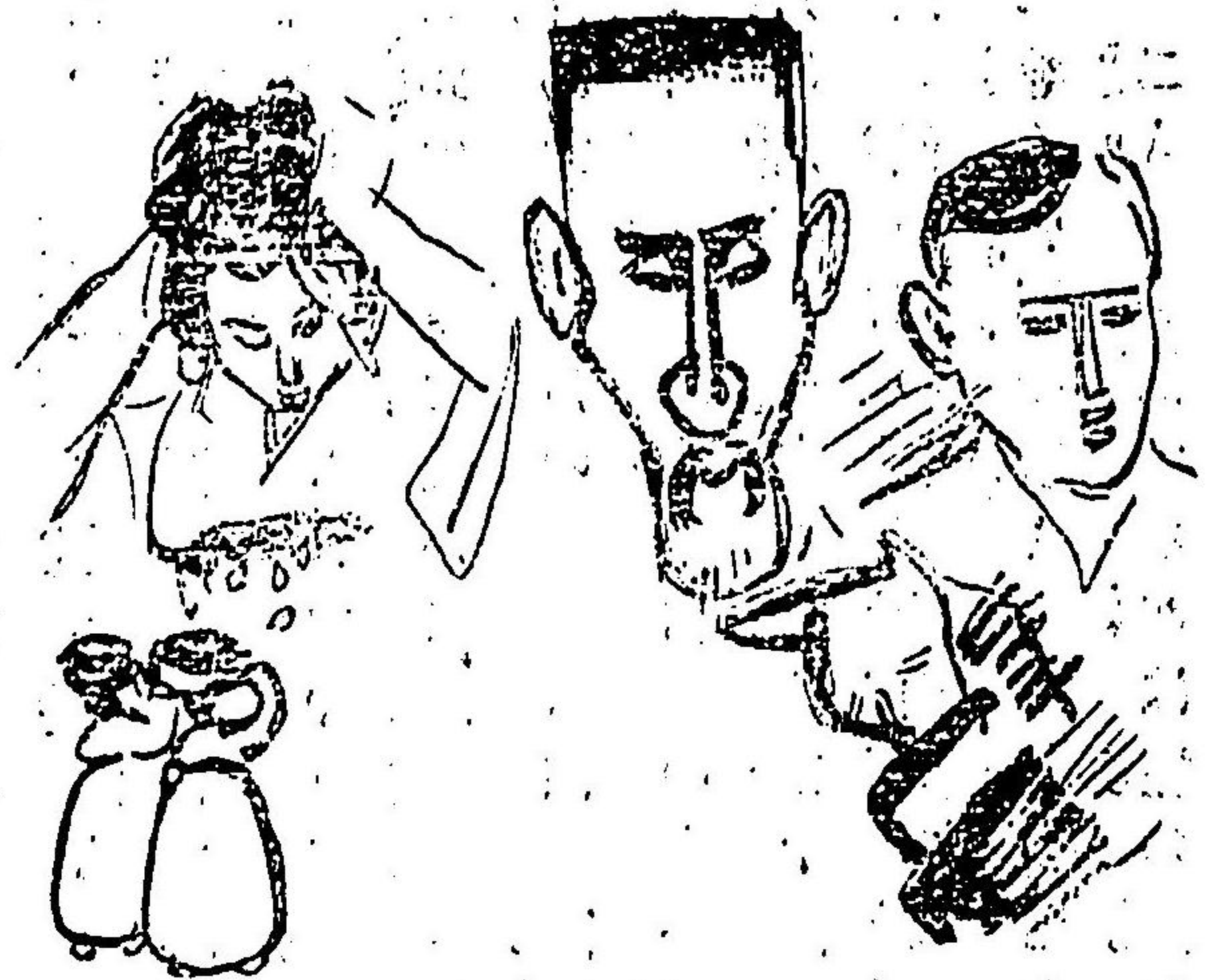
いつの間にか皆酔ひつぶれて寝てしまつた。慶之助の、

「私は歸ります。」と管を巻くやうに言つてゐたことも、お筆の、

「手枕にしてあげるわ。」と白い腕をだらし無く投げ出して縮り無く笑つたことも、耳に残つてゐるやうに覺えたが余は引入られるやうな心持に眠つてしまつた。ビールの酔に加はつた薬酒の酔は火の玉の如く體中を駆けめぐつて唯だ昏々と眠つた。

夢心地に痒いと思つて余は右の手をガリ／＼と掻いた。幽かに目を明けて、フロッツクの儘仰向けに倒れて口を開けてゐる洪さんを一寸見たが、もう頭を動かして其以上を見る勇氣は無かつた。翌朝眼を覺ました時にはもう誰も室内にゐなかつた。昨夜の月明りよりは稍々明るいかと思はるゝ位で、まだ短夜の明け離れ初めた頃かと思はれた。岑々と痛む頭を起こして余も表に出て見た。

昨夜は十分に見えなかつたが今朝見ると此家の割合には大な土間があつて、其處に三つ許りの竈と軒に届く許り積み重ねた柴とがあつた。さうして其處に煙を立て、炊事をしてゐるのは昨夜の老尼と同じ服装をして、足には草鞋を穿いてゐたが、凡そ五十許りと思はるゝ尼であつた。



表に出て見ると、室内を考へた程ではなく、もう夜は峯の松に明

け放れてゐた。赤い汚れた上衣を着た十二三と同じ服装をした十許りの子供が二人頭に水甕をのせて目の前の徑を上つて來た。見ると稍々下つたところの一つの井戸らしいものがあつて、其ほとりに洪さんもお筆も慶之助も立つてゐた。余は慶之助の事はもう忘れてゐた。彼も昨夜我等と一緒に酔ひ倒れたのであつたといふ事を彼を見て初めて思ひ

出した。さうして筆の手枕を何うとか言つた言葉をも思ひ出した。慶之助は今も筆からハンケチを借りて顔を拭いてゐた。

「何の爲めに昨夜あんなに薬酒を飲んだのだらう。」と考へると其は狐につまゝれたやうな感じてあつた。それでも涼しい朝風は頭の痛さを極めて此山寺らしい四邊の景色は騒立つた心を推沈めた。井戸の處から四五間下つた谷間に一軒の掘立小屋があつて其處に二人の白衣の人が臼を搗いてゐた。よく見ると二人共に尼て其一人の方は二十許りの醜い若い尼であつた。其牙え無い低い臼の音が此山里の夜明けの心持を遺憾無く現はして月に響く唐臼の音よりも却つてなつかしいやうに覺えた。

二人の子供の水酌は空の甕を頭に載せて先の上つて來た細道を今度とはぼとぼと下つて行つた。五分刈の頭である爲めに日

本の子供に馴れた目はふと其を男の子かと思つたがよく見ると何處となく優しげな處があつて、まが方無き女の子であつた。余も其あとについて其細道を下りて行つた。

「いつか此方に上りつゝあつた洪さんと余は途中で行き逢つた。昨夜お休みになれましたか。」と洪さんは慰問するやうに言つた。

「苦しい」と思ひ乍ら其でも前後不覺に眠りました。」と答へた。洪さんは少し顔を上げるやうにして、

「こゝをカラーで折んなに傷めました。」と飛出た喉笛の兩側の磨りむけたやうに赤くなつてゐるのを見せた。余は覺えず噴き出して笑つた。

井戸端に行つて見るとも筆も慶之助も余を迎へて微笑した。

お筆は少し俯向き加減になつて髭の形を直ほし乍ら、石橋の兄さん、到頭來なかつたねえ、ひどい人だわ。」と余に向つて叱るやうに言つた。

「昨夜は逆でも彼方では狭くて睡れなかつたらうと思ひます。お蔭ですつかり元氣を恢復しました。」と言つて慶之助は大きく息を吸つて體操をするやうに兩脇を後ろへ張つた。

二人の子尼は井戸端に頭の上の甕を下ろして、丸い瓢を半分に分切つたやうなもので、其溜り水を抄つては甕に入れた。其水底に沈んでゐた黒い蛙は、傍の石を攀登らうとして落ちては長い脚を水の中に延ばして浮んでゐた。子尼は其に頓着なく、其水を抄うては甕に入れた。さうして二つの甕に満つると、相當に重みの

あるのを彼等は巧みに頭に載せて、其水を一滴もこぼさぬやうに直立の姿勢を保つて前の細道を登つて行つた。やがて年上の方は余等が泊つた寺の門に這入り、年下の方はすぐ隣の門に這入つた。

「君の泊つてゐる寺は彼處では無いのだな。」と余と共に其子尼の行衛を見送つてゐた慶之助に言つた。

「え、もう一つ隣の方の門です。あの中、の門の寺には昨夜私達の來ました時分、鐵琴の音らしいものがしてゐました。大方韓人の客が泊つてゐるのでせう。」と慶之助は答へた。

「お筆は彼掘立小屋に於ける二人の尼の白を搗のを見てゐたが、あれは何を搗いてゐるの？」と余の傍により添ふやうにして聞いた。

「米だらう。」

「だつて、日本では足で踏んで搗くはねえ。朝鮮では手で搗くの。其處はどうか知らんが、あんな白いものは米より外にはあるま
50」

こんな話をし乍ら余は其牙え無い鳥の低聲に咬いてゐるのかと思はるゝやうな人の心を滅入らす臼の響きに耳を澄ませた。其時ふと見ると彼の中の寺の門から朝鮮人の男女が姿を現はして此方を見てゐた。一人はたしかに妓生に相違無く普通の女よりも派手に見えた。

「鶴見君君のいふ通りあの者等が昨夕泊つたのだ。」と言つて余は其方を教へた。

「あゝ成程あれ等ですな。今頃は暑い爲め餘りあゝいふ客が無

いさうですが、春や秋になるとあんな連込み許りださうですよ。と慶之助は三軒の寺を見て言つた。

「さうすると我等のやうなものが來たり棺を昇ぎ込んだりするのには全く異數なんだね。」

「さうですとも貴方がたは兎も角もとして棺は異數かも知れませんが。お寺であつて棺の異數といふのも變な話ですけれど。」

余等はそんな話をしてそろ／＼と坂道を戻り掛けた。お筆も道傍の草の葉を一つ抓つて其を破つては棄て乍ら余等のあとについて來た。其時彼等男女の客もそろ／＼と門を離れて此細道を下りて來かけたが近づいた時余は覺えず叫んだ。

「素淡！」さうして男の方を見ると是亦昨日松林の模擬店の前を通つて見覺えのある金成植であつた。

あの妓生だわ！と筆も亦た後ろで叫んだ。素淡の方も氣が附いたらしく、何とか言つて一寸立止り顔を染めたが、其言つたことは余には判らなかつた。金成植は知らぬ風を装うて余等を遣ふ過ごした。

慶之助は自分の寺の方に一人別れて歸つた。洪さんはフロツクの儘で仰向けに倒れて低い天井を眺めてゐた。

洪さん奇遇ですよ。隣の寺に素淡と金成植が來てゐますよ。さうてございますか。」と洪さんは起きかへり乍ら落着いて答へた。

朝飯は彼の草鞋を穿いた五十餘りの尼の手料理であつた。洪さんは

格別旨さうなものもございませぬ。」と言ひ乍ら彼れ此れと箸をつけた。悉く脂臭くつて食へさうなものは無かつたので、余もお筆も御飯許りを食つた。見ると庭を隔てた部屋では昨夜の八十許りの老尼と彼の水を酌んだ子尼とが向き合つてこれも朝飯を食つてゐた。老尼はシヨボクした眼を瞬き乍ら何も屈托の無い人のやうに悠然として大きな匙を使つてゐた。さうして時々子尼と何か話し合つてゐるらしかつた。此方では洪さんが悲惨な口許を動かし乍ら不味さうに食つてゐる、其が自然に極端な對照を爲してゐて面白く眺められた。

洪さん歸りませうか。」と余は箸を投じてから言つた。「さうてございます。石橋さんはどうなすつたか。」と言ひ乍ら洪さんは時計を見て、もう八時を過ぎました。」と言つた。

「ぢやあ歸りませう。」と余は早速立上つた。

尼は宿料といふやうなものを要求しなかつた。考へて見れば布團も火も何も無かつた。唯體を横たへたといふに過ぎなかつた。宿料の請求をせぬのも面白と思ひ乍ら食料に多少の心附を添へて渡した。二人の尼は乞食が手を合はすやうに合掌して、「タニダニ、コマブステダー。」とか何とか言つた。僧尼は非人乞食などよりも下等なものになつてゐるといふ話と思ひ出された。三人とも流石に疲勞を感じて、何やら腹立たしい人のやうに無言で表に立つた。何か一言慶之助に言つて歸らうかとも思つたが其も止めた。

ふと見ると彼の二人の尼が臼で米を搗いてゐるあたりよりもまだ大分下手の方から谷川傳に素淡と金成植とはとぼくと歸

りつゝあつた。我等の一行が見えた時彼等二人は横路に凡れた。清涼亭に寄つて見たが剛三は遂に來なかつたといふ事を彼の見張りの男は答へた。彼男は十二時頃迄表にしやがんでゐたといふ事であつた。

閔妃の墓道である廣い通りに出る前であつた向ふから粗末な麥藁帽を被つた商人らしい一人の日本人が遣つて來た。さうして其が不思議にも洪さんと知り合ひらしく二人で話をした。余とお筆とは四五間行き過ぎて待つてゐたが洪さんはまだ話してゐた。洪さんと話し乍ら彼の男は鋭い眼を光らせて我等の方を見た。

「探偵だな。」と余はすぐ覺つた。さうして不愉快な感じを抑へることが出來なかつた。

「あの男を何だか知つてるか。」と余はお筆に聞いて見た。
「探偵でせう。」とお筆は平氣で答へ、「随分御苦勞な商賣ね。」と冷
笑するやうに言つた。

二十七

南山樓に歸つて見ると剛三は昨夜から歸らぬと言つた。

「貴方がたと御一緒では無かつたのですか。」とお京は不審らし
い顔をした。一應南山樓迄來た洪さんは

「其ては後程又伺ひませう。」と言つて歸つた。

「上野さんも今朝見えて何の話も無かたが、をかしいのねえ。」と
お京は尙剛三の行衛を不審がつてゐた。

余はお筆と一緒に剛三の部屋に行つて見た。今朝はまだ掃除
もしてないと見えて昨日の儘に散らかつてゐた。

「あゝ草臥れた昨夜は散々な目にあつてよ。」とお筆は昨夜の概
略を話した。

「でもお寺で雑魚寝なんか洒落てるわね。」とお京は笑つた。

「余はそんな話よりも此の剛三の部屋の模様が何となく氣にな
つた。水に溺れたとか汽車に轢かれたとかいふ變死人の居間に
這入つた時凡ての調度などが取片附けて無く今迄續けて來た彼
の生活がぶつりと中斷されたかの如き形になつてゐるのが妙に
人の心を打つものであるが恰もさういふ感じを起すのであつた。
剛三は死んだのではあるまい。けれどももう永久に此部屋には
歸らぬ人のやうに思はれて仕方が無かつた。」

「あゝ眠むい。」とお筆は、お京の肩に兩方の杖を重ねて其上に顔を推し當てるやうにして眼を眠つた。其がお京に對していかにも妹らしく見えた。

「本當に仕様の無い駄々兒ねえ。夜遊をしては歸つて來ては眠い〜といふ。」とお京は又姉らしく叱るやうに言つて貴方ももうおよしなさい。今朝も奥様から電話が掛つて來ましてよ。」と余をもたしなめるやうに言つた。

「兄さん、あなた眠くは無いの。」とお筆は小さい眼を開けて言つた。

「眠い。僕も暫く寝やう。」と言つて自分の部屋に歸りお京の來るのを待たず自分で布團を引張り出してごろりと轉がつた。昨夜の薄べり一つて五躰の痛かつたあとに布團の柔さは染々と肌

に覺えられた。

「おやもう寝なすつたの。」と布團を延べに來たお京の這入口に立つて獨言を言つたことは耳に這入つたが其後の事は知らなかつた。

三日の疲勞が一時に出たやうに覺えて寝返りをするのは覺えてゐ乍らいつ迄も〜眠りをつぎ足した。妻は此日宿に歸つた。

二十八

其後數日間余は尙ほ京城に滞留してゐたが剛三は遂に歸らなかつた。おとやなどは、

「どうなすつたんでせうねえ。」と度々不審さうに言うたが、お京は其に就いては何事も言はなかつた。お筆は、「私見棄てられちやつたやうな譯ね。」と戯談らしく態と拗ねたやうな顔をして見せた許りて、これも多くは言はなかつた。部屋は暫くまだ元の儘にしてあつた。

剛三の失踪といふ事は自然お筆を余の部屋に入れしめる機会を多くしたか、妻は厭な顔をせぬ許りか、好んでよくお筆と話した。私貴女の踊が見度いわ。

「え、大威張りてお目に掛けますわ。」と斯んな話をし合つて笑つてゐることもあつた。慶之助は或日遣つて来て彼の草稿を持つて行つた。其歸る時にお京は口を開けたビール瓶を持つて客の座敷に行く所であつ

たが立どまつて、

「今晚見に行くわ。」と小聲で慶之助に聞こえるやうに言つて一寸破顔した。慶之助は、

「どうか是非。」と顔を下げた。其時お筆は店の大きな火の無い火鉢の傍に他の女中等と輪を作つて坐つてゐたが、慶之助の方には眼もくれず、極めて尊大に取り澄まして知らぬ風をしてゐた。其が他の女中の手前を氣兼ねしたといふよりは、眼中に慶之助風情は無いやうな素振であつた。

剛三が居無くなつたといふ事は當然お筆の境遇に一變化を來すべきであるに拘らずお筆は依然として傍若無人に振舞つてゐた。宿の主人も亦た格別前と異るところ無く其爲すが儘に任せ

或日洪さんが来た。此頃齒が痛んで頗る難義をしたと言つて、肉の落ちた頬の片方を少し腫らせてゐた。

「私一二日うちに平壤の方へ参る積りてございます。」

「長く御滞在ですか。」

「さうでございます。まあ二週間位の積りてございます。」

「それでは私ももう京城を立たうかと思つてゐますから或は又平壤でも目にかゝるかも知れません。」

「お宿はどちらになさいですか。」

「平壤へ行くなら松屋に行けと兼々石橋なども言つてゐましたから、其積りて居ります。」

「それでは私の方から松屋へおたづね致しませう。」と斯んな話をして洪さんは歸つた。

京城は名残惜しくもあつた。けれども一日も早く此處を去り度いやうな心持もした。余等夫婦が南大門で人々に送らるる身となつたのは洪さんが立つてから二日目であつた。剛三が座敷を散らかした儘で踪跡を晦ました程では無いけれども、お筆なり慶之助なり、素淡なり、金成植なり、凡てをあるが儘にして出發するところに慌しい心持があつた。

例の飾りの無い實用一方の、其自身が一つの武器のやうな大きな汽車は余等を載せて又北へくと走するととなつた。停車場に着く度に五分間の停車時間を余も妻も必ずプラットフォームに降りて歩いた。遠近の兀げた山々から想像外の冷たい風の吹いて来る事が車中の蒸れる様な暑さに困憊した二人を蘇生せし

めた。プラットホームを歩いて三等室の窓から見るとも無しに中を見た時に何處か見たことのある三人の親子連れがあつた。やがて其は疑ひも無く彼の馬關の停車場で係員に劍突を食つてゐた老人夫婦と娘とであつたことに氣が附いた。

「慥か馬關でもお見受け申したかと思ふが何方へお出でですか。」と余は聞いて見た。

「満洲へ。」と老人は答へた。筒の大きい震へを帯びた聲であつた。よく聞いて見ると水原に次男がゐるので其處に今迄逗留してゐたが奉天にゐる長男の許に行く處だと言つた。目の釣り上つた口の大きな娘は桃の皮を齒でむいては窓の外に吐き出してゐた。

二十九

汽車が平壤に着いたのは午後三時過であつた。暑い日の照りつけてゐる茫漠とした空地がすぐ停車場の前に廣がつてゐた。

出迎へてくれた松屋の番頭は、

「もう一時間も致せば涼しくなります。」と言ひ乍ら極めて愛憎よく揉手をした。

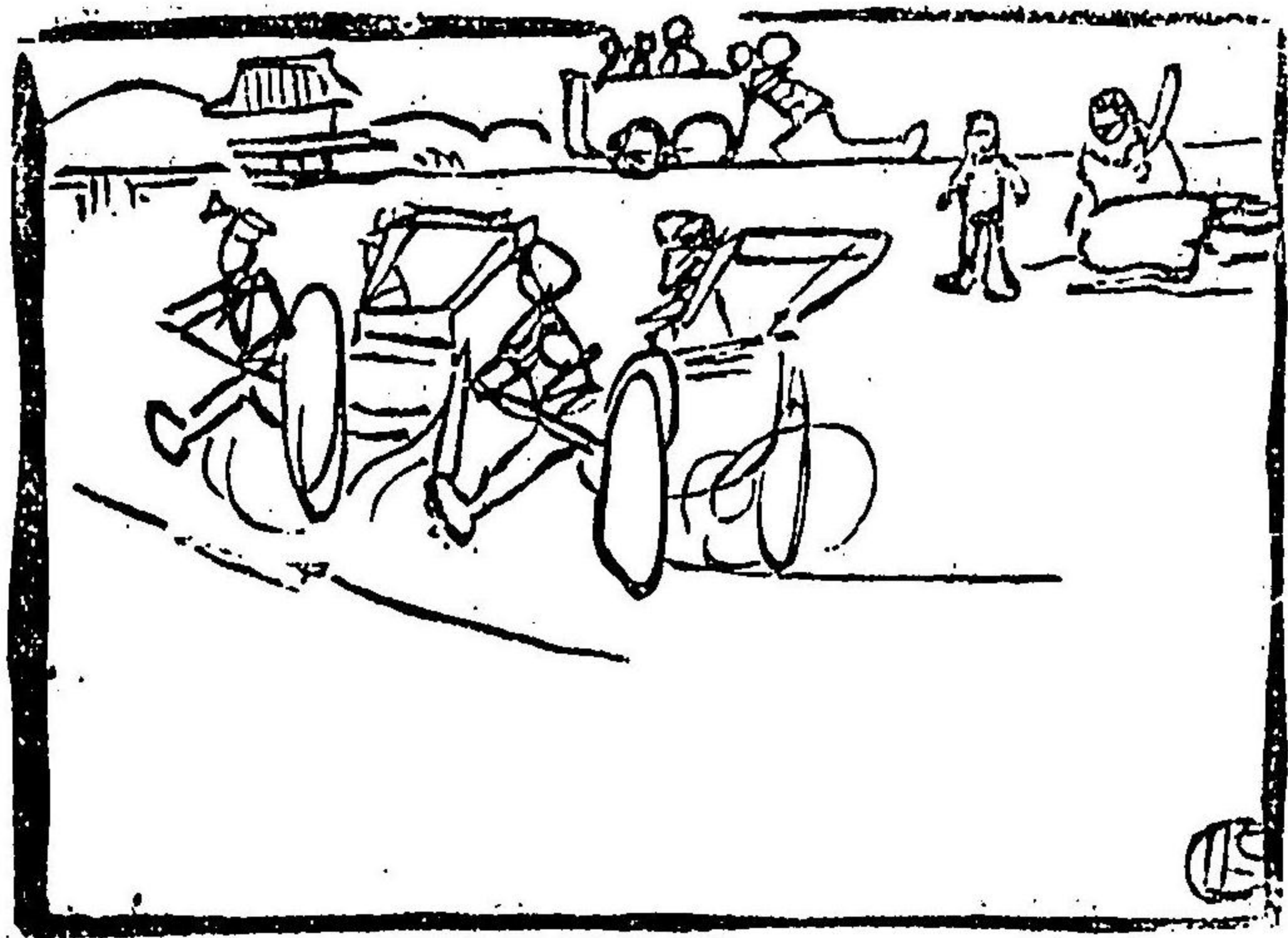
「此鹽梅だと日中は京城よりも暑いだらう。」と余は殆ど往來の形を爲さぬやうなほこしくした土の上にいらしくした日光の照りつけてゐる其空地を眺めた。

「本當ねえ其に丸て野原みたやうぢやありませんか。どこが町なの。」と妻は心細さうに言つた。之を立聞きしてゐた番頭は、

「新市街はこゝから二十町と申しますけれども車で参ればすぐ
でございます。でも荷物は？」と又揉手をした。此番頭は帽子に
赤い帯をして其に松屋ホテルといふ文字を白く抜き出してゐた。
其帽子の下から埃によごれた汗の流れてゐるのを白いズボン
のかくしから取り出したハンケチで拭うて笑顔を作つた。余は
二枚の切符を渡すと番頭は其を一寸推し戴くやうにして手荷物
受取口へ行つた。

「いさましい番頭さんね。」と言つて妻は微笑んだ。何でも松屋
は朝鮮で一番氣の利いた宿屋だといふ評判を京城で聞いた事が
あつた。南山樓のやうなのが殖民地を通じての宿屋の特色かと
思つてゐたが番頭の容子からしてがまるて違つてゐた。

番頭が荷物を受取つてくれる間二人は日蔭に突立つたまゝ唯



ぼんやりと焼けつくやうな日光
を見てゐた。何處迄が停車場の
構内で何處からが畑なんだか草
原なんだか區別が附かず唯一體
に廣々とした空地のやうに見え
た。さうして停車場を少し離れ
たところにとロツコでも運びさ
うな狭い二條のレールが敷かれ
てあつて其に會つて熱海鐵道で見
たのあるやうな人車の箱が四
五輛も並んでゐた。今停車場を
出た人は大概此箱の中に乗り込

ひと汗と埃で黒くなつてゐる白衣の鮮人が二人此の箱の後ろに手を掛けて走り出した。鮮人の走るあとに砂煙が騰つて其箱は忽ち遠ざかつた。其次の箱も定員の客が乗り込むと同じやうにして發車した。

〇八二

番頭は受取つた荷物を直ちに一人のチゲに背負はして余等の前に戻り、

「どうもお待たせ致して済みませんでした。お荷物は柳行李一個と鞆一個でございますな。慥かに宅のチゲに背負はせましてございませす。」と言つて二臺の車を我等の前に据ゑた。二臺の車共に松屋といふ二字を白く染め抜いた紫の旗を翻へしてゐた。

番頭が帽子を取つて軍隊式に腰を曲めてゐるのを後ろにして二臺の車は熱い日光の下を駆けつた。京城の市街ではまだ感じ

無かつた暑さで油のやうな汗が自然に皮膚から染み出た。車夫は松屋の印絆纏を着て足には草履を穿いてゐたが草履の尻がバタ／＼と跳ね上る度に軽い砂埃りが脛脛の邊迄立つた。

「これが大陸的の暑さとてもいふのだらう。」と獨り考へた。京城の南大門の停車場を降りて狭い賑かな涼しい夜の町をがらからと駆けた時とは大變な相違であつた、往來は何處迄行つてもだゞ廣かつた。片側にポツリ／＼と粗末な日本家があつたが其等は大方木賃宿のやうなものであつた。我等の車のあとからも又一臺の人車が來たがあとを推してゐる鮮人が力が盡きて車の後ろに飛び乗り惰力で僅に動く時になると忽ち我等の車よりも後れた。

暫く行つてから横町に出ると此處は埃の立たぬ代り大きな石

一八二

ころが往來中に敷いてあつて、其上を車夫は滅茶苦茶にひいた。

「大變な道だね。」といふと、

此間政務總長がお見えになつた時修繕の爲めに入つたのでござ
います。それでもこれにて餘程よくなつたのでございませう。と車
夫は呼吸を切らせ乍ら言つた。其道傍には朝鮮家屋と日本家屋
とが交つて飛びくにあつた。とある二三軒の朝鮮家屋の前に
は雨水の湛つたのかと思はるゝやうな濁水の湛があつて、其處に
は朝鮮の女が衣を叩いて洗濯をし裸體の子供が泳いでゐた。

暫くして車は漸く松屋の前に着いた。忽ち玄關前に三四人の
若い女中が現れて頭を並べてお辭儀をした。さうして其中の一
人が帽子や傘を受取つて先に立た。

通された部屋は十疊と六疊の二室を打通した廣々とした二階
座敷であつた。

「大變な繁昌ですことね。」と妻は言つた。なる程どの部屋にも
客があるらしく殆ど満員かと思はれる位であつた。どんな人が
泊つてゐるのだらうかと余は廊下を隔てた向ひ側の部屋を覗く
やうにして見た。首筋の肉のだぶ／＼と肥え太つた浴衣を袂衣
紋に着て向ふ向いて坐つてゐる一人と頻りにぢる／＼と我等の
方を見る五十餘りの小ぢんまりとした一人とが目に入つた。女
中は「入らつしやいませ。」と改めて慇懃に挨拶をして茶を酌んで
出した。涼しい風がどこからとも無く吹いた。余は浴衣に着替
へて大きな坐布團の上に胡坐をかき脇息に肱を凭せた時生き返
たやうに覺えた。

「お風呂を見て参りますから。」と女中は又一禮をして引下つた。間もなく宿の主婦が挨拶に来た。

四八二

「此座敷は少し朝日がさしまして如何かと存じますが、何ならば明朝になりますと外に明くお座敷がございますからお取替致します。女中共は誠に不行届のもの許りてございますか、どうか御勘辨下さいまして……」と主婦らしい態度を保ちつゝ、丁寧に挨拶をして、

「此お方様が昨日お見えになりました若し御用がありますればこの肩書きのしてあるところに電話を掛けて戴くやうにとの事てございました。」と言つて一枚の名刺を出し、後ろの廊下に膝を突いて控えてゐる女中を振り返つて、

「あゝさうかい。」と言つて改めて余等の方を向いて、

「どうかお風呂にお召し下さいませすやうにお案内致させます。」と又頭を下げて引下つた。名刺を見ると其は洪さんであつた。

二人共湯に這入つて出て来た時分にはもう天地が變つたやうに涼しくなつてゐた。手すりによつて表を見渡すと、この邊も尙ほ空地が多く、チャンと十字に道路は作つてあるが草が生えてゐる許りて家は建つてゐなかつた。膳を運んで来た女中に、

「此邊はもう新市街のうちだらうね。」と聞いて見た。女中は、「左様でございます。詳しくは存じませんが何でも大同門通りから此方が皆新市街だとか申すとてございます。」と答へて、

「御酒は如何致しませう。」と聞いた。

「貴方召上るでせう。」と妻は聞いて、

「どうか願ひます。」と女中に傳へ、

「一體の容子がまるで南山樓と違ひますのね。」と女中が行つたあとで妻は言つた。余は尙手すりに凭れたまゝで、

「全くだ。其にあたりの景色もまるで京城と違ふぢやないか。」と答へて、此曠野のやうな廣漠たる新市街を見渡した。舊市街によつた方と思はれ、處には此處等あたりとは違つて大分人家があらうかと想像されたが、其でも京城のやうな繁華な模様は見えなかつた。さうして緩い線を描いた一つの丘陵が其後を通つて左手の方に延てゐた。銚子を持って來た女中に、

「姉さん、あの丘は何處になるね。」と聞いて見た。

「あれが牡丹臺になるのでございませう。」と女中は答へた。

酒を飲み乍ら女中に名を聞いた。女中は笑つて答へ無かつた。國を聞いても答へ無かつた。年は勿論答へ無かつた。唯つゝま

しく笑つてゐる許りであつた。此夜余は餘り多くは飲まなかつた。妻にも二三杯すゝめ自分も七八杯を傾けた許りて止めた。

三十

翌朝洪さんに昨夜來着の旨を電話で報じると、洪さんは御近處迄行く序があるから間も無く伺ひます、といふ返事であつた。

便所の手前のラムプ部屋でラムプ掃除をしてゐる男を見ると、昨日妻の車を引いた男に相違無かつた。頭を五分刈にしてゐるが、餘りものを言はずニタ〜と笑つてゐた。さうして一人の女中が、

「佐々木。」と呼棄てにすると大きな聲で、

「ハイ。」と返辭をしてバタ／＼と廊下を歩いて臺所の方へ行つた。

朝飯の時の女中は昨日のとは違つてゐた。昨日の女中は布圍を上げたり掃除をしたりしたが、朝飯の給仕は別人であつた。これは昨日の女中に比べると老けてゐた。

「今便所に行く時見たのだが、ラムブ掃除をしてゐた男は昨日車を引いた男だね。」と余は此女中に聞いて見た。女中は笑ひ乍ら、

「左様でございます。」と答へた。

「佐々木といふのだね。」

「よく御存じてゐらつしやいます。」と女中は給仕の盆を膝の上に置いた儘こらへられぬやうに笑つた。

「車を引いた男つて貴方の車ですか。」と妻は言葉を挿んだ。

「いへへお前のさ。」

「あの男日本人ですか私朝鮮人かと思つた。」

「奥様朝鮮人なんてございますよ。」

「それで佐々木といふ名前なんですか。」

「いつの間にか皆が佐々木／＼といふと當人も返辭をするので

ございますよ。」と女中は又をかしさうに笑つた。

「此家に朝鮮人は多勢ゐるかね。」

「あの男の外に三助と料理番とがさうでございます。」

「さうすると此料理も朝鮮人が拵へるのだね。」

「さうでございます。」

「昨夜食た洋食なんか大變旨かつたぜ。」

「初め日本人の料理人が三年許り居りまして、其間始終一緒にゐ

てよく覺えたのでございます。朝鮮人はなか／＼器用でございます。すよ。」と此女中は昨夜の女中よりもよく喋つた。昨夜の女中の名がお花で此女中の名がお桂であることも此女中の口から説明された。それでも南山樓のお京などは全く様子を異にして何處となく地味であつた。主婦も此二人の女中も皆信州のもので殊に此お桂は主婦と親戚同様のものゝ松屋創業の時からゐるのだと言つた。

お桂の去つたあとで妻と余とは何となく落着いた延び／＼とした心持で斯んな事を話し合つた。

「いゝ宿ですわね。」

「ふゝ、いゝ宿だ。こゝに數日間滞在してゆつくり平壤を見物しやうぢや無か。」

「えゝ、さう致しませう。でもあの往來と日中の暑さには閉口ね。昨日は私死にさうだつたわ。」

「けれども朝晩は又京城よりもつと涼しいやうぢや無いか。」

日中晝寝をして朝早くと夜遅く遊ぶんだね。」

「此處は何か見るものがあるんですか。」

「朝鮮の京都といふ評判だもの新市街は殺風景なやうだが多分舊市街の方にいい建物もあるんだらう。洪さんでも來たらゆつくり聞いて見やうぢやないか。」

「えゝ。」

廊下では一人の女中が何か朝鮮語交りて話してゐた。何とかでチヨバリだとか何とかでチヨッソだとかよく耳にする朝鮮語に日本語を交へて話すのであつた。其て相手のものには判るら

しく、ネエネエと返事をしてゐた。其相手といふのは例の佐々木君であるらしかった。

其處へ洪さんの來た事をお花さんが知らせて來た。

洪さんは相變らず例のフロックを着て來た。

「昨日お訪ね下さつたさうして。」と余は挨拶した。

「毎日のやうに御近處迄參ります序てございました。」

「近處といひますと。」

「代議士で辯護士の松田さんの事務所てムいます。此處から見えるてございませう。」と洪さんは正座したまゝ身をねぢて表を見た。大方空地である中に三軒の棟割長屋が程遠からぬ處に建つてゐた。「あの三軒のうちの真中の家でございます。」

「へえ、あの長屋に辯護士事務所があるのですか。」

「さうてございます。」と言つて

洪さんは笑つた。

「松田は私も知つてゐる男だ。」

「さうすると貴方は訴訟事件で

此方へお出でになつたんですな。」

「さうてございます。」

「それでは御多忙でせうな。少

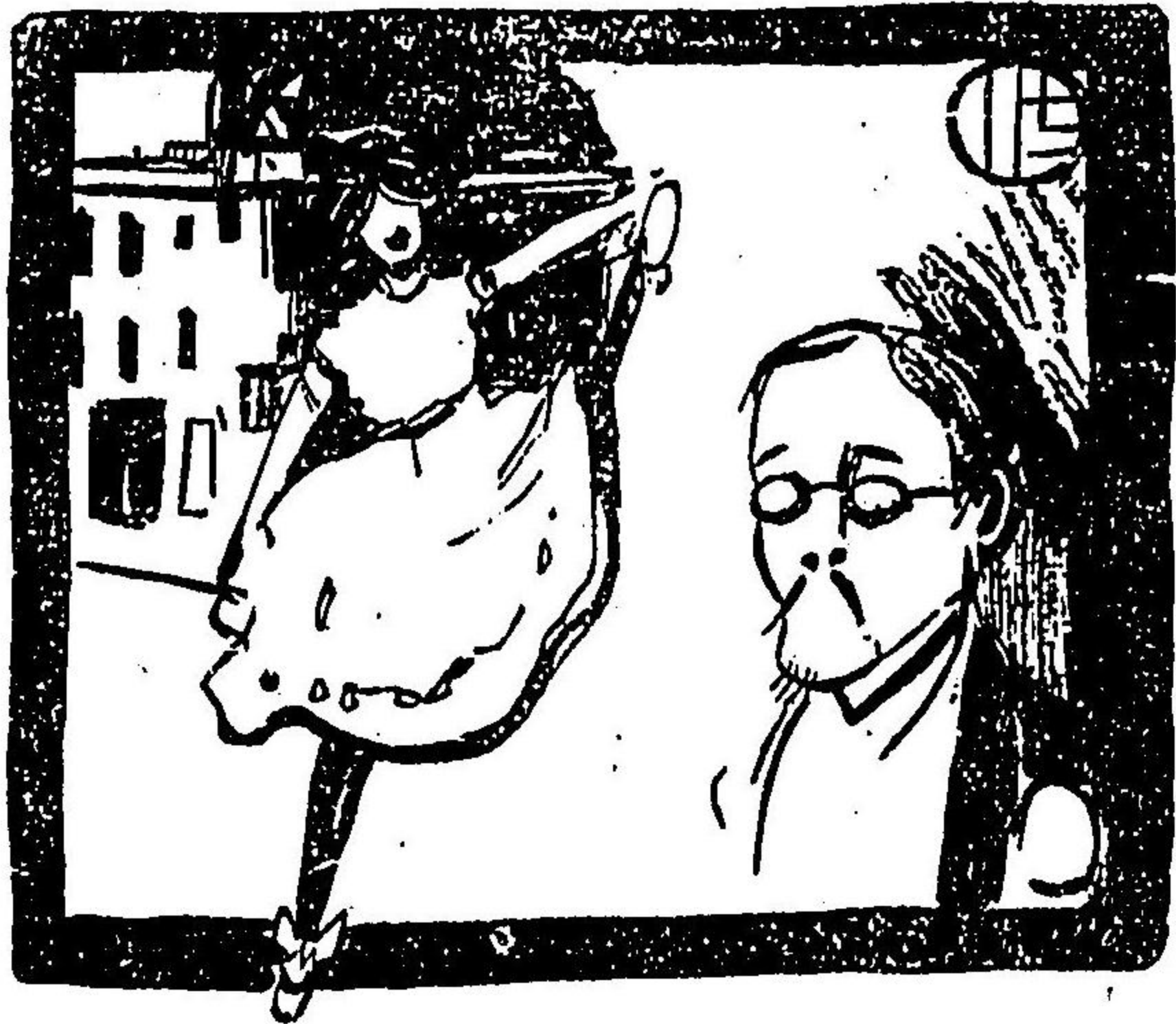
しお閑がありましたら又此地の

御案内を願ひ度いと思つてゐた

のですが。」

訴訟事件はなか／＼容易にはかど

よろしうございますとも。



りませんから、いつでも御案内致します。

其から簡単に石橋や筆の噂などをして、兎も角今日午後五時前から牡丹臺に案内しやうと言つて洪さんは歸つた。歸りにもう一度松田の事務所に着ると言つてゐたので、妻と二人で手すりの處から見下ろしてゐると果たして洪さんは例の姿勢で彼の三軒長屋の中央の家の格子を開けて這入つた。

松田さんといふのはあの松田春子さんのお父さんですか。

森田

「さうだ。」

「へえ、こんなところで辯護士をしてゐらつしやるのですか。」

棟割長屋の事務所は面白いね。」

「さうすると此頃ではお娘の方が有名なのですわね。」

「さうさ。あれで非常に子煩悩な男だからな。あの棟割長屋で

朝鮮人を相手に金まうけをしてゐるところを娘に見せて遣り度いね。」

斯んな話をし乍ら尙見るとも無しに松田の事務所の方を見てゐた。二階といふても低い鐵格子の窓が一つ附いてゐる許りて其處には簾が釣つてあつた。隣の家の二階には鐵格子の中に一鉢の鉢植が置かれて裸の人の動くのがよく見えたが、松田の二階は簾のある爲めに唯何物かほのめくやうに思はれる許りであつた。往來は日光の威力がだん／＼と加はつて来て白衣の朝鮮人の團扇を翳しつゝ通るのも稀になつた。余は松田の二階の暑さを思ひ遣つた。

松屋の門内から二臺の車が出た。車夫は昨日我等を引いた二人であつた。佐々木は帽子も被らずに相變らずニコ／＼し乍ら

炎天の下を駆けつてゐた。主婦始め、お桂お花其他の女中も一齊に門前に出て見送りをしてゐた。

即ち余の部屋に來たお桂に聞いて見た。

「今立つたお客様は誰かね。」

「前の方が吉田工學博士で後の方が古河さんの高峰さんでございます。」

「何しに來たのだらう。」

「何でも此近處の鑛山を見に入らしつたのださうでございます。」

四五日うちに又お歸りになる筈でございます。」

「へえ、何の鑛山？銅かね、鐵かね。」

「金山だとかいふ事でございますよ。」

其日午後向ふ側の部屋の客は二人共西日をよけて廊下近く座を占めてゐた、其に余が目禮したのが縁となつて二言三言談話を交へた。

「もう長く御逗留ですか。」

「私等はまだ一月許も滞在してゐます。」と襟元の肉の段々になつてゐる肥えた方の男は答へた。立派な八字髪を貯けた四十近い客であつた。片方の小まめな客の方は五十前後で淋しい髭を貯へてゐた。此方は答へ無かつた。

「平壤は随分暑いやうですね。」

「殊に昨日あたりからひどくなりました。貴方は御漫遊ですか。」

「さうです。唯見物に参りました。」

唯これだけの談話であつたが、それがもとになつて洪さんの來

る迄に又一度話をする機会があつた。其時は淋しい髭の小男の方もよく話した。

其は吉田工學博士の來て居つたと、ふ事が話題になつて鑛山の話に移り、小男は斯う言つた。

「平安南道、黄海道、江原道あたりは、全土が鑛脈だと言つてもいいさうです。今度吉田さんの來たのも、黄州の近傍に一つの大きな鑛脈がありますのを、總督府が古河さんに遣らす考らひです。迎ても普通の人は手におへない程の大規模なものださうです。からね。」

「貴方がたも鑛山に御關係ですか。」

「いゝへ……」と小男は笑ひ消した。

「何にせよ朝鮮政府時代では、外國に金銀などの出るのを惜んだ

爲めに採掘を禁じたといふのですからな。清正や行長の踏んだ土地の下が皆鑛や石炭鑛なのだから面白いぢやありませんか。」

と肥えた男が快活に話して笑つた。

「山林の方も鐵道沿線などこそ禿山許りですが、もう十里も内地に這入りますと忽ち鬱蒼とした森林に出喰はすのです。伐林事業もこれからですな。」と小男は又言つた。

「朝鮮といふ國は古い國でもう荒され抜いた洋のやうな國かと思つてゐましたが、するとさういふ方面は全く手がつけて無いのですな。古い國で新しい國とでもいふのですかな。」と余も相槌を打つた。

「其から其日は余も妻も晝寢をして、湯に這入つて稍々涼しくなつて來たのに、蘇つた如く感じつゝあるところへ、洪さんが豫定の

時間よりも早く来た。向ふの部屋の二人の客も我等と同時に晝寐をしたやうであつたが今は二人共目覺めて、これも涼しくなつて来るのに勢を得て、相變らず西日をよけて廊下近くに陣取りつゝ話してゐた。此時這入つて来た洪さんの形容枯槁といふやうな顔がどういふわけだか格別に衰へてゐるやうに余の目に映つた。けれども其油断のならぬ眼附きと一癖ある口許は相變らず人の注意を牽くと見えて、向ふの二人の客は迂散らしく見送つた。急いで晩飯を濟ませて三臺の車を命じた。表に出て見ると、まだ日は高かつたが其ても、昨日宿に着いた時刻よりは稍遅く、もう凌ぎ兼ねる程の日ざしては無かつた。

車は停車場と反對の方に驅けつた。もう殆ど一月も降らぬとの事で石の敷いて無い此邊の路は車の轍を深く没する程の泥が

すつかり乾き切つてほこ／＼になつてゐた。三臺の車は其自身影を隠くす程の土埃を立て、驅けつた。

尙暫く日本家屋の飛び／＼に建つてゐる處を驅けつた末、朝鮮町に這入つた。これはもう舊市街になるのであらう。朝鮮町は、京城で見たのと同じ事に汚かつたが、やがて其町を抜けて他の町に這入ると其處は京城で見たことの無い程、殷賑な町で人通りも多かつた。

此般賑な町は、兩側共商舖が軒を並べ、各舖の内外は固よりの事、往來の中央迄人立ちがして、何となくどよめき立つてゐた。殊に

めい／＼の口から出る言葉が意味は分らぬながらも鋭く響いて、
會て洪さんが平安南北道は多く壯士を産すると言つた言葉が思
ひ出された。余を戴せて先頭に進んでゐる日本車夫が彼等を叱
りつけて道を開く時煙管を啣へた儘でざろりと他を見る男の眼
は何となく物凄かつた。

繩を編んで拵へたやうな容物の中に四通りも五通りもの米が
積上げてあつて其奥には足を廣げて蹲み長い煙管を啣へて空
目に人を見てゐる男があるかと思ふと表の低い鴨居を片手で突
上げるやうにして片手で煙管を人でもなぐりさうな恰好に握つ
てゐるものもある。其米屋の隣には酒幕があつて三人許りの男
は顔を赤く染めて白い齒をむいて往來を見乍ら談笑してゐるか
と思ふと其隣りに金銀細工物とていひさうな店があつて二人

の職工は一生涯懸命に鋏を使つてゐて其處に兩班らしく絹の上衣
を着た男が悠然と其を見てゐた。其時余の車夫が「あぶないッ。」
と日本語で叱るやうに言つて烈しく片方に突除たのは子供を負
つた女で、其女はたぢ／＼と殆んど倒れさうになつたのを漸く踏
み止まつて口の中でぶつ／＼と小言を言つたが、周圍にゐる多く
の朝鮮人は何とも言はなかつた。余は車夫が蠻聲を出して彼等
を叱りつける度に何となく氣が退けた。邯鄲の市とか邯鄲の少
年とかいふ言葉が頭を往來して此任俠氣を負ふ平壤の市人が一
旦何事にか憤怒して我等を包圍したら一耐りも無いやうな心持
がし、余の後ろに續く二臺の車の音も頼母しくも聞え心細くも聞
えだが先づ何事もなしに進んで行つた。

此の時ふと軒並の商舖を見もて行く中に倉卒に見たら見落す

かと思はれる位の小さい店ではあつたけれども、朝鮮人の店許りの間に突として日本人の店を見出した。はつと思ふ間に車は行き過ぎたので店に並べて賣つてゐた者が何であつたかは殆んど見定めぬ間が無かつたが、矢張り朝鮮人相手に朝鮮の雜貨を賣つてゐるものらしく思はれた。若し表に遊んでゐる子供が日本の下駄を穿き日本の着物を着てゐなかつたら或は軒並の朝鮮人の店と同様に見て過ぎたかも知れなかつた。これによく似た光景は京城でも時々見たが、其でも此處のやうに我等の外に一人半人の日本人も往來せぬ町に尙ほ日本人の店のあるのを見たとは此時を以て初めとした。營養不足らしい其親子三人の顔も此場合何となく頼母しく思はれて振り返り乍ら眺め入つた。

暫く行くうちに夫婦と思はるゝ西洋人が驢馬位に小さい朝鮮

馬に跨つて我等を追ひ越して行つた。其男の顔も女の顔も一寸見た目には卑しく見え服装も貧しげに見えた。けれども我等三臺の車さへ目立つて見える此往來に此異人夫婦の馬上姿は市人の眼を峙たしめた。

此町は長い町であつたが、其が盡きると又淋しい町になり、即て目の前に一つの丘陵が現はれた。丘陵は左に低く長く延びて右の方には稍小高く廣々と廣がつてゐた。車夫は勾配の急になつた坂路を尙勢ひ込んで十間許りも走り上つたが遂に其處に棍棒を下した。

「これがもう牡丹臺ですか。」と余は聞いた。

「さうでございます。牡丹臺の續きでございます。」と答へて洪さんは先に立つた。妻の絹張りの蝙蝠傘が輝いた日光を反射し

つゝ立木の無い赤土の山道を登つて行つた。

我等は唯だ緩かな丘を登りつゝあると思ふ間に、一方は何十尺といふやうな高さの崖になつてゐて其上に立つと一望數里に續く平野を見渡すことが出来た。洪さんは其崖を上から見下ろし乍ら、

「これ御覧なさい。考への無い人間にも困つたものではございませぬか。ところどころに残てゐますやうに、此處は一面に城壁でございまして立派な石崖が御座いましたのを、西洋人や日本人や兩班などが其石一つを一錢とか二錢とかで買つたものでございませぬから、チゲどもは皆争うて此石を盗みました。難攻不落と言はれて居りました城の跡も、石崖が壊れた爲めに愈々見る影も

無いものになりました。」と慨然として歎息するやうに言つた。

日の力が弱り始めると、暑さの退くのも慌たしげに早い。いかにも古戰場らしい四邊の景氣を余は心をとめて見つゝ、崖の上を歩いて丘のだんぐら廣がつてゐる方へ進んで行つた。

ふと見ると往手に當つて遙か彼方の廢殘の石崖の上に立つて、夕日に小手を翳し乍ら此方を眺めてゐる羽織を着流した一人の日本人があつた。我等が車を丘の麓に乗り棄てゝから此處に来る迄數町の間日本人は固よりの事朝鮮人にも出逢はなかつた。

唯崖の下の方野の一部分に模範農場があつて其處に出入してゐる日鮮人を小さく見下ろした許りであつた。其處に突として此一人の日本人を見たことは空谷の響音であつた。さうして近よつて見ると、其は洪さんの知人であつた。

「兩班らしい歩きぶりをする處が君らしいと思つた。」と其人は重々しい口を開いて洪さんの瘦れた冷たさうな手を握つた。

「どうして君は此邊にまごついてゐたのだ。」と洪さんも手を握りかへし乍ら馴れ馴れしく言つた。

洪さんは一言二言其人と話した末、

「丁度いゝ男に出逢ひました。」と言つて此人を余等夫婦に紹介した。此人は朝鮮新聞の平壤支局長であつた。「大内君は戦争通でございませうから私よりも適任者でございませう。君得意な説明を一つ遣つてくれたまへ。」と洪さんは半分冷かすやうに言つた。支局長は口許に微笑を湛へた許りて明白な答を與へずに先に立つた。

洪さんと支局長とは何か話し合ひ乍ら城壁のあとに沿うて歩

いた。其の話は主として此地の民團長選舉に就ての噂であるらしかつた。余は妻と共に黙つて其あとに従ひ乍ら初めて古戰場を訪ふた自分と此處で民團長選舉談をする彼等二人との感じの相違を思つた。

暫く行たと思ふ頃支局長は立止つて右の手で此あたりに珍らしい一つの密林を指して、

「あれが箕子陵です。」と言つた。

取り毀たれた城壁の礎に舊態を留めてゐると思はるゝあたりに出ると一つの城門が聳えてゐた。屋根の瓦はところ／＼破損して柱其他の木材には蜂の巢のやうに穴が開いてゐた。

「これが皆彈痕です。」と支局長は又説明して自ら其彈痕の一つに障つて見た。支局長の太つた短い指の尖を入れても餘りある

程の大きな穴であつた。我等は城門の上を石崖から石崖へと通
過しつゝあるのであるが、此城門の下に當つて石崖の中にアーチ
形の穴があつて、其處を二人の韓人が何物をか脊負つて通りつゝ
あつた。通り過ぎてから城門を振り返つて見ると「七星門」といふ
額が掲げられてあつた。

「どういふ風に清兵は攻めて來たのでせうか。」と余は其邊の地
形を眺め乍ら聞いて見たが支局長は其には答へずに尙づんづん
と先に進んだ。さつき遠望した箕子陵はすぐ足下に見えるやう
になつて、老松の叢生した中に可なり大きな殿堂が隠見された。
洪さんは一切の説明を他に任して自らは知らざるものゝやうに、
瘠せた長い體を垂直に立て、稍々我等の列を離れてとぼくと
歩いてゐた。俄に暑さの退いた夕暮近い日影は淋しく其横顔を

照らし、いつも左程に烈しいとは覺えぬ頬の窪みが光線の具合で
著しく目立つて見えた。妻は絹張りに夕日をよけて之も亦黙々
として余について來た。

支局長は又一つ樓門の見える、今迄來た丘のうちで一番高いか
と思はるゝ處に來て立止つた。余も妻も洪さんも矢張り立止つ
て其の周圍に立つた。三人の眼は列の通り支局長の口を開く前
に先づ指さした一つの方向に走つた。

立見枝隊は此方面から來たてすな。さうですあの小さい山を
越えて、それから此方に續いてゐるあの細道を突撃して來たもの
らしいです。例の原田重吉の玄武門といふのはすぐ此の下にな
ります。もう立見枝隊が此の城壁に肉薄した時分には清兵はも
う他の各枝隊の襲撃に耐へ兼ねて退却を始め掛けてゐたといふ

事です。其で清兵はあの道逃げたですな。それ、グッと遠く迄續いてゐるあの一直線の道です。其をあの兩方の山に待伏せした日本兵が夾撃したものですから堪らない彼の有名な白馬隊は殆ど此處で全滅してしまつたので、馬の死骸だけ道埋め遠望すると恰も白い毛布を敷いたやうであつたといふ話です。」と言つて支局長は愉快さうに笑つた。眼前に廣々と開けてゐる景は恰もパノラマを見る如く、唯彼處や此處に其白馬隊や立見枝隊が描かれて無いだけの相違であつた。其白馬隊の全滅したといふ一直線の長い道には眼界の及ぶ限り一人の人影を認めなかつた。「實に立派な古戦場ですな。」と嘗て關ヶ原や桶狭間などの存外小規模なのに失望した事のある余は、此の雄大なる景に打たれて覺えず嘆稱した。

「私もさう思ひます。古戦場と申しましても實際行つて見ると失望するのが多いものでございますが、此處は誠に古戦場らしい心持のするところでございます。」と今迄黙つてゐた洪さんも口を切つた。

「洪さんは西洋の古戦場も澤山御覽でしたらう。」

「澤山も見ませんが、ウォートルローなどは一寸見に參りました。詰まらんとところでございます。」と事もなげに言つた。

「其からあれが牡丹臺です。」と支局長は前面に峙つてゐる三角形の尖峰を指した。

「其ては此邊は牡丹臺のうちに這入らないのですか。」と余は自分の立つてゐる地點を振り歸り乍ら聞いた。

「さうです。此邊は乙密臺といつてゐます。あそこ迄行つて見

ませう。」と支局長は更に先に立つて行つた。先の場處から四五間も進んだと思ふと一つの樓門に達して其處に立つと北西の展望は稍々缺ける代りに東方の景は新たに眼前に開けた。樓門の彈痕は彼の七星門に比べて尙ほ遙かに甚だしく屋根の尖角なども慘刻に崩壊してゐた。

「あの水は？」と余は初めて前面に展開された汪洋たる流れを見て驚いて聞いた。

「あれが大同江です。」と支局長は答へた。

「まあ何ていゝ景色なんでせう。」と妻は蝙蝠傘を疊んで杖に突き其彈痕だらけの樓門の柱に片手を掛けて殆ど足下を流れてゐるともいふ可き幅の広い水を見下ろした。夕日影はもう薄い明るい色を留めてゐる許りて暑さは全く跡を絶ち冷たい風が乙密

臺上の四人に吹いた。

「絶景ですな」と余はもう古戦場といふ事などは忘れてしまつて天の成せる自然の勝地として此水と此丘陵とを併せ考へた。

「あの建物は何てせう。」と妻は牡丹臺下の木の間に見えぬ古い建物を指した。

「あれは永明寺といふ古い寺であの大同江に臨んだところに稍々離れてある一つの建物は浮碧樓と言つてよく文人墨客の遊びに来るところです。あそこに下りて見ませう。」と支局長は又先に立つた。洪さんは又黙々に戻つて我等と一緒に歩いてゐるといふ許りであつた。

其處をだら／＼と降りると石崖の中に又一つのアーチ形の通路があつた。

「これが例の玄武門です。小さい門です。」と言つて支局長は笑つた。

「まあ、あの名高い玄武門といふのがこれなんですか。」と妻は蝙蝠傘を上げて高さをはかるやうにした。蝙蝠傘の柄の尖の金具はアーチ形の天井にすぐ届いた。余は日清戦争当時歌舞伎座に於て先代菊五郎が原田重吉に扮した事があるのを思ひ出した。其時大勢並んでゐる同じやうな兵隊の中から一人つかくと隊長の前に進んで行つて「中隊長殿私が誓つて此門を開けます。私の一身は願ふところではありませぬ。固より國家に捧げた體てありますから。」といふものがあると見ると其が菊五郎の原田重吉であつたので観客は小屋も破れん許りに拍手喝采した。其は忘れもせん妻と結婚當時の事であつて妻も大きな鬚を結つて一

緒に土間に坐つたのであつたが常に小銃が豆を煎るやうに鳴つてゐるので、妻は、

「マア怖いこと。」と私に余に寄り添ふやうにしたこともあつた。其時舞臺の下手に長谷川の大道具が拵へた玄武門は斯んな小さい門では無かつた。と余は計らずも當時の事を回想して彼の酔つばいやうな物の爛熟したやうな香のする芝居の中の空氣を心に描いてゐると、妻は、

「大變な樂書ですわね。」と其邊を見廻した。なる程多くは内地人の拙い文字で天井にも兩側にも殆ど空地が無い程めいめいの名が書かれてあつて中には代議士の名もあり「天下無敵日比野雷風」といふやうな文字も見えた。

玄武門をくゞつて暫くだらくと坂路を下ると性丹臺を後ろに乙密臺を右手に見上げたところに一つの廣い臺地に出る。其處に先に乙密臺から見下ろした永明寺や浮碧樓などの建物はあ

るのである。浮碧樓といふ名は斷崖數丈の上に大同江の碧水を踏まへて浮めるが如く立つて居るといふ意であらう。樓上には浮碧樓といふ大字の額と、其景勝を説明した漢文の額とが掛つてゐたが今其額の後ろから一つの大きな蝙蝠が出て人を驚かした上に何か小さいものを地上に落して羽音高く飛んだ。

氣をお附けにならんと南京虫が取附きますよ。」と言つて支局長は微笑した。

蝙蝠に南京虫が居りますか。」

「居りますとも。此浮碧樓では先刻も言つた通り韓人がよく酒宴などを催ほすので其残肴にありつく蝙蝠に自然南京虫が移つたものらしいです。」

バカい韓人の身もなれぬ

妻は韓人といふ言葉を聞く度に氣の毒さうに洪さんを見た。洪さんは知らぬ風をして大同江を見下ろしてゐた。

「まあ彼處に大きな島がありますのね。」と妻は洪さんに近づいて一緒に大同江を見下ろした。

「さうでございます。あれが綾羅島と申しまして名高い中洲でございます。昔此川上數里の所にありましたのが家も畑も其儘に一夜の間に此處に流れて來たと申す傳説がございます。」と洪さんは答へた。家といふのは數へる程ほか無く一面に平板な畑が見渡されたが其等がいかに土地と共に川上がら流れて來た

といふのに相應しいやうな静かな太古の趣を具へてゐた。大同江の水は、此處から充分に見分けのつかぬ邊の川上から二つに分れて此綾羅島をとり巻いて流れ、此處より數町下の處で合流して汪洋として煙るが如く南下してゐる。此方の岸が斷岸絶壁を爲してゐるのに對して水を隔てた彼方の岸は綾羅島と同じ高さの平地が數里に續いて、此變化を極めた江山の果てが遂に静かな長い裾を、遠くに見える低い一帯の山脈迄延ばせて居る。

「何だか此邊は妙に臭いのね。」と妻は石疊みになつてゐる樓上を見廻した。余も最前から其臭氣を感じては無かつたが唯景色に眼を奪はれてゐて其を口にする邊を見出さなかつたのである。

「さうだ、何だか臭いね。」と初めて其邊を顧みた。

「酒の零れた匂ひでございます。」と待設けなかつた洪さんが其時突然横合から口を出した。見ると洪さんの顔には憧れるやうな色が動いてゐた。歌舞伎座の棧敷の敷物の酒に染みて腐つた匂ひに憧憬する余は此洪さんの心持に直ちに同感せずにはゐられ無かつた。けれども鼻になれぬ此臭氣は幾度思ひ直ほしても矢張り不愉快な匂ひであつた。一羽の蝙蝠が今度は樓の天井から飛び出して大同江の上を渡り遠く綾羅島の上を飛んだ。三人は黙つて其行衛を見守つた。

「少しお休みになりませんか。」と後ろから支局長が呼んだ。

「お掛けなすつて下さい。」と續いて女の聲が聞えた。見ると此處から數間離れたところに一つの掛茶屋があつて、其處に支局長はもう腰を掛けてゐた。三人は終に其方に歩を運んだ。

小さい板葺の小店にはビール、サイダー、正宗罐詰類が並べてあり、其前の葎天井には例の赤や青の手拭のやうなものがぶら下つてゐた。何方を見ても日本で見ることの出来ぬ雄大な江山の中にチヨンポリとこの日本風の掛茶屋の點出されたことも面白く思はれたが、其に我等を出迎へてゐた其の三十餘りの女の美しく垢抜けのしてゐたことも亦た目を牽いた。

「どうかお掛けなすつて下さい。」と女は又愛嬌よく腰を屈めた。其白い齒の幽かに見えた時の顔は暮の遅い夏の日をいつの間にか一刷毛掃いたやうな夕影の中に自立つて見えた。

支局長は此茶店の主婦とは古い知り合ひらしく何かと世間話しのやうなことをし乍ら我等にビールをすゝめた。

「貴女はいつから此處に店を出してゐるんです。」と余は言葉を挿んで聞いた。女は其廓然した曇りの無い目を余の方に向けて、「足掛け四年になります。」

「冬も此處にゐるのですか。」と其純粹の日本風の板屋であつて温突らしいものも見えぬ住居の冬の寒さを思ひ遣つた。

「さうでございます。最初の冬は耐らなく寒いやうに思ひました。二年目からは左程にも思ひませんでした。」と女は答へた。大同江も氷つてしまふといふ事だから此邊の土地なども凍つてしまふてせう。

「其はもう土地の下三四尺から凍つてしまひます。」

「其頃は餘り客も無いでせうね。」

「偶にぼつり／＼とある位のものでございますが冬中は先づ休

みてございます。」

「此邊には他に人家らしいものも見えぬが、夜分など随分淋しい
てせう。」

「其も馴れますと何でもございませぬ。」

「泥坊などは来ないですか。」

「二昨年の冬一度来た許りです。其も泥坊といふ程のものでも
ございませぬでしたが……と言つて女は板屋の奥に坐つて何か
をしてゐる眼鏡を掛けた髷ムシヤの男を振り返つて見て笑つた。
彼の美くしい白い歯がさつと他の目に映つた。」

「へえ、其はまだ聞かなかつたが、其な事があるのかね。」と支局
長も熱心に女の顔を見た。妻も洪さんも女の顔を見詰めたけれ
ども女は其儘口を噤んで話さなかつた。

「どんな風な泥坊であつたので
す。無論朝鮮人でせうね。」

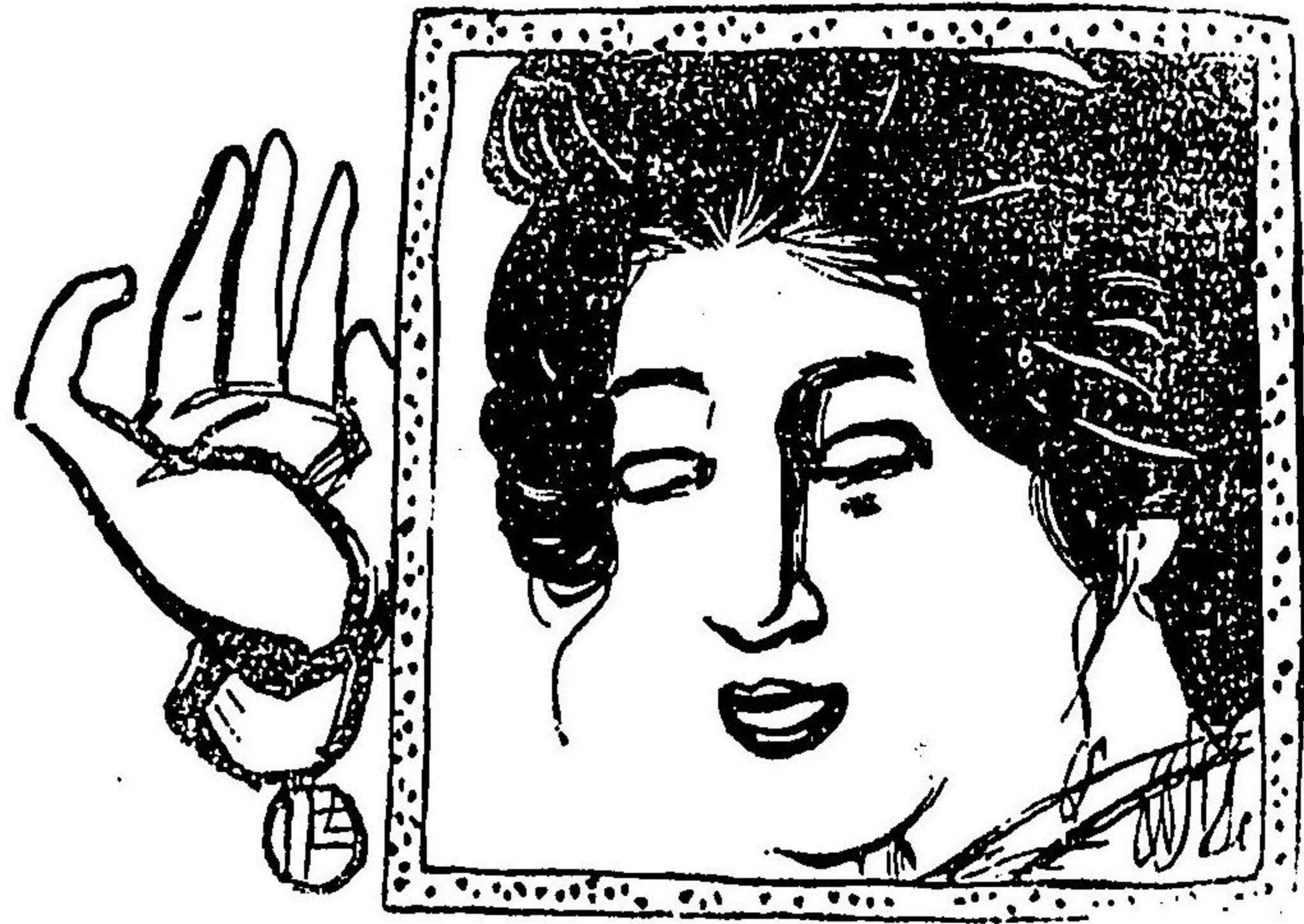
「さうでした。」と女は止むを得
ぬやうに答へた。

「何人でした。」

「三人でした。も一人居つたや
うでもありますが私の眼にとま
つたのは三人でした。」

「其て別に怪我はしなかつたて
すか。」

「たいした怪我もしなかつたて
すが其時噛みつかれたので……」



と言ひながら彼女は右の手の小指を見せた。其は關節のところ
が曲つた儘になつてゐて此の廓然した眼白い齒の女には相當し
からぬ醜いものとなつてゐた。

「まあ」と今迄黙つて聞いてゐた妻は驚ろいたやうに嘆聲を洩
らした。夕影は更に一刷毛くくと加はつて来るやうに何となく
四邊がもの淋しく見えた。けれども眼前に展開してゐる大同江
の水の上にはまだ明るい夏の日影が漲つてゐた。

此處迄話して来た女はもう此儘黙つてしまふことは出来ぬと
観念したらしく遂に次の如く三部始終を話した。

私が氣がついたのはもう宅が一人の賊に組み敷かれてゐた時
なのですが何ても其迄にもう大分宅と賊とは争つたらしいので
す。」と言つて又板屋の方を顧みたらが掛ムシヤの主人は彼の妻の

話は聞こえぬものゝやうに知らぬ風をして下を向き初めからの
仕事を續けてゐた。「何にせよ賊は多勢だし宅は一人であつたも
のですから……何ても宅がふと眼を覺まして見ると一人の賊
が立つてゐたので、宅はいきなり跳ね起きて其賊を投げたところ
が、後ろから別の賊が抱きついて其賊と上になり下になりしてゐ
る所へ前の賊も起きて来て手傳つたので終に組み敷かれたので
すねえ。私が眼が覺めたのは其時でした。ランプが消えて眞暗
であつたものですから、宅がどうしてゐるか賊が幾人だか其も判
らず唯ふと見ますと這入口に一人大きな男の立つてゐるのが湖
明りに見えたので行きなり其處にあつた鍵請を取つて投つけま
すと其男はバタ／＼と逃げてしまつたやうでした。其時何處や
らで呻くやうな聲がするので初めて氣が付き聲を掛けると宅が

返事を致しました。上か下かと聞くと下だといひます。其處で私は前後も忘れて其の上になつてゐる賊に後ろから組付きますと、そのとき此の指に噛み附かれました。さうすると又一人の賊が私を壁際に投げつけ、もう向ふも怖くなつたのでせう、二人とも一緒に表に飛出して逃げてしまひました。其から漸くマツチを探し出してラシプを點して見ますと宅は貴方顔から手から血だらけてございませう、賊は刀を持つてゐたのでございませう。其から私も気が附いて見ますと此小指が食ひ切られたやうになつてゐました。」と話し終つて流石に其時の心持を思ひ出したやうに呼吸をはずませてゐた。

「其はどうも大變なことだつたのね。其て御主人の怪我はどうであつた。ひどい事は無かつたかね。」

十日餘りに癒つてしまひました。初め賊が一人か大勢か其を見極めずに行きなり一人を投げたのが誤りだつた初めから三人もゐたと知つたら遣りやうがあつたと言つて宅は残念がります。けれどもまあたいした怪我が無かつたのが仕合せでございませう。と女は又板屋の方を顧みた。

「今初て聞いたが危い事であつたですな。」と支局長も板屋の方を向いて話し掛けた。

「へい。」と男は初めて乙構さうに顔を上げて眼鏡を光らせたが、髯にかくれた口に微笑を見せて又腑向いて仕事にかゝつた。髯の立派な割に鼻が低く額が狭く風采の上らぬ顔であつた。

「其後はもうさういふ事はありませんでしたか。」
「一度来て見て何も取るものゝ無かつたのに向ふも吃驚したの

てございませう、もう其からは一度も参りません。」と女は晴れやかに笑つた。

妻は深く此話に感動したらしく、

「まあよく初め此處に茶店を出すことをお思ひ立ちになりましたのね。」

「宅が斯ういふ所が好きなのですから其に國を出る時、どんなことでもする覺悟で参つたものですから。」

「お國は何方でゐらつしやいます。」

「大分縣でございします。」

「お子さんはおありにならないのですか。」

「ございませぬのですよ。」

「まあ其ては一層お淋しうございしますわね。」と熟々同情したや

うに言つたが、でも、こんないゝ景色を貴女方で占領してゐらつしやるやうなものですわね。」と又慰め顔にも言つた。夕暮の空に黒く峙つてゐる牡丹臺の巔から白い服を着た一人の韓人が此方を指して降りて來つゝあつた。洪さんは我等の會話には關係無き人のやうに其牡丹臺を見上げたり大同江を俯瞰たりしつゝ彼の悲惨な口許を緊く閉ぢてゐた。

女が向ふに行つた時余は支局長に聞いた。

「あの女の名は何といひます。」

「まだ實は名を聞いたことがありません牡丹臺の茶店の女で通つてゐるものですから。」と支局長は微笑し乍ら答へて又此方に來た女に「貴女は何とか言つたな名は？」

「牧でございします。」と女は笑ひ乍ら躊躇もせず答へた。

「お牧の茶屋か。」と余は此名を心の底に牢記するやうに口のう
ちで繰り返した。

三十二

一艘の船は今四人を乗せて大同江を下りつゝある。船頭は頭
を五分刈にした若い朝鮮人であつたが日本人と少しも變らぬ調
子で日本語を話した。

「今は上汐のやうだね。」と支局長は言つた。

「さうです。」と船頭は答へた。

「上汐といふのは？」と余は不審に思乍ら聞いた。「海がそんなに
近いのですか。」

「海迄は七八里もありませんが此邊迄潮の満干が影響します。」と
支局長は答へた。上汐に逆つて漕ぎ下る船足の遅いことが此場
合又なつかしいとの一つであつた。

船が綾羅島を離れうとする頃入相の鐘が水上に響き渡つた。
ふり顧つて見ると乙密臺と牡丹臺との二尖峰は海明るい大空に
聳えてゐて其兩裾の流れ合つた處に大地に埋まるやうに古い屋
根を見せてゐるのは永明寺其から離れて大同江に臨んだ高岸の
上に夕影の中に浮み出た如く突立つてゐるのは浮碧樓であつた。

「あの休んだ茶店は？」と妻は心當てに見た。

「お牧の茶屋か。」と余は心の中で獨語した。

「あゝ、あれがさうですわね。」と妻は指した。浮碧樓の左手に當
つて凡て雄大な蒼古な黒ずんだ色の中に白々とした輕げなもの

がチョンホリと目に映ずるのは慥かに其に相違無かつた。唯景色として見るのには或は其は目障りとなるであらうが其中に賊と格闘した明眸皓齒の一婦人がゐて無人島に國旗を立てた人のやうに淋しく膝を膝つてゐることを思ふと誠に棄て難い眺めてあつた。

暮鐘の渡る水の幅は下るに従つて廣くなつて來た。さうしていつとも無く白い霧が遠く我等の行手を立て罩めた。

あの船は何をしてゐるのですか。」と衣冠束帯の人がお三輪の持つてゐるやうな糸巻を持って糸を水中に下してゐるのを見て聞いた。

釣りをしてゐるのでございます。」と洪さんは口を開いた。

さうだらうとは思つたのですがいかにも悠長なものですな。

真逆漁師では無いのでせうな。」

「さうてでございます。あれ等は樂にやつてゐるのでございますが中には漁師もでございます。」

我等の船は其釣船の横を通つた。釣人は長い袖をまくるでも無く静かに其糸巻を持つてゐた。魚が彼の針を引いた時彼は如何に其糸巻を取扱うかを見やうと思つたが無益であつた。綸は静かに水に落ちてゐる許りて水底の魚は彼を驚かさうともし無かつた。

斯様な船は他には尙幾艘もあつたが衣冠束帯の人を乗せてゐることは皆前の船に變らなかつた。大同江の廣い水は恰も竹の散葉を浮べたやうに輕々と是等の船を其江心に浮べてゐるのであつた。

右岸は彼の乙密臺の處から續いてゐる廢殘の城壁が尙ほ江に添うて下り、其下は切崖を爲して其處の岩壁に種々の文字が刻んであつた。其中に一際目立つて大きな文字は「玉流屏」の三字であつて、其處には我等の乗つて居るやうな輕舟が二三艘も繋がれ兩班らしいものが四五人宛分乗して、高聲に歌をうたつてゐた。皆赤く顔を染めて我等を見ると一際聲を張り上げて歌つた。

「あの歌は何といふ歌ですか。」と余は洪さんに聞いた。

「斯ういふ意味の歌でございますよ。」と洪さんは譯してくれた。

「上

神様にお願をかけて商買に行つた。

中

小さな壺がだん／＼大きくなつた。

下

これは神様のあかげであらう。」

楫をこぎ乍ら黙つて洪さんの翻譯を聞いてゐた船頭は此時は「いゝいゝ」と笑つて

「慾ばつた歌だ。」と恰も自分の國の歌を輕蔑するやうな調子で言つた。其言葉は洪さんのよりも調子のいゝ日本語であつた。

行手の白い霧はだん／＼と濃くなる上に、右岸に近く下る我等の船からは左岸の方を見ても薄い霧が掛つて、さなきだに廣い川幅は前にも倍して廣く、前途は茫邈として大海原のやうに見えた。

右岸の高い岸は城壁と共に少しづつ低くなつて來て、其上にボツ／＼と朝鮮人の家屋があつた。さうして白衣の朝鮮婦人は崖

の細道を下りて水際に蹲踞して洗濯をしてゐた。衣を石の上に置いて棒を持った右の手を上げて其を打つ音が手に取るやうに聞えた。だんくゝ人家が殖えるに従つて此の婦人も亦た敷を増し、或る場處には十四五人も列を作つて、一齊に衣を搦つてゐた。

「あの藪の中に見えてゐる高い建物は何ですか。」と余は心を躍らせて聞いた。恰も屋氣樓を見るやうな古びた丹碧の高樓が藪の中から現はれ始めたのである。

「あの二つ見える高い方が大同門、低い方が鍊光亭です。昔小西行長が明の將李如松と和を講じたのがあの鍊光亭であつたといふやうな傳説もあります。」と言つて支局長はいつもの微笑を洩した。

右岸の人家はだんくゝ殖えて行く許りか、いつの間にか城壁は

もう無くなつて川岸に廣い平地が帯のやうに出來、其處に澤山の貨物が山の如く積まれ、和船や韓船や支那の戎克などがもやつてゐた。

「これは日露戦争當時でした。城壁を崩して岸を埋め、貨物の陸揚げに便利なやうにしたのでした。御覽なさい、此邊の建物は皆立派なものでせう。韓人であるて二三十萬の財産のある商賣人は澤山居ります。」と支局長は説明した。成程見ると大厦高樓が楡比して岸を往來する人も活氣があり、船頭等の荷物の揚卸しの掛聲も勇ましい。今日車上から見た彼の邯鄲の市の事も思ひ出だされて、此古都の富み榮えて居る様が我事のやうに頼母しく思はれた。

「平壤は景色のいゝ點が京都に似てゐるといふ事を聞いてゐた

が此の大同江を有し商賣の盛なところを見ると寧ろ大阪といふ方が適當なやうですね。詰まり京都と大阪とを併せて而かも規模を擴大したといふやうなところですね。」と余は激賞した。

「さうです。」と支局長は賛成した。洪さんは口の端に大きな皺をよせて冷やかな微笑を湛へてゐた。

「どこに着けます。」と興味が無さうに黙つて我等の話を聞いてゐた船頭は突然斯う言つて聞いた。

「税關の横に。」と支局長は答へた。

「はい。よろしい。」と船頭は又勇ましく漕ぎ出した。其調子がどうしても純粹の日本人としか思へ無かつた。唯日本の船頭ならば退屈の餘りに鼻唄でも謡ふてあらうと思ふ所を此船頭は黙つて漕いだ。

「お前は日本に居た事があるのかい。」

「はい。福岡や、鹿島や、高松に居た事があります。東京にも一月許り居りました。」

「さうだらう。話が全く日本人と同じだ。」と余は讚めて遣つた。若いものはすぐに覺えてしまひます。其に小さい時分から覺えたのはアクセントが正しうございます。」と洪さんは傍から口を出した。

「さきに霞の中に現はれた鍊光亭はいつの間にかもう右手に聳えて、近よつて見ると遠望した時想像した程の古色は認められなにして、大同江畔に缺くことの出来ぬ趣味ある建造物として、時ち第一江山といふ扁額の金文字が人の目を射た。

「あやう、あの古びた建物にガラス障子が箆てあるのは變です

ね。」と余は驚いて目を睜つた。洪さんの目も怪しく光つたが何とも言はなかつた。

「今は郵便局長の官舎になつてゐるのです。」と支局長は答へた。此の鍊光亭がですか。

「さうです。すぐ此の鍊光亭に接して建てられたあの木造の粗末な洋館が郵便局ですからな。」と支局長は笑つた。

余は其ガラス障子をはめて白い窓掛けを掛けて此鍊光亭の中に住まつてゐる郵便局長や其家族を考へずにはゐられなかつた。彼等は嗜み好んで此處に住まつてゐるのであらうか恐くさういふ譯でもあるまい。軍隊が進んで或城市を占領した時に大きな公の建物は取り敢へず其舎營に當てられる。察するに日清日露兩戦時の慌だしい面影が今尙ほ改變する機會を見出さずに今日

に至つたものであつて、火事の立退人を收容した寺の本堂に襦袢の下つてゐるのと同格と考へれば寧ろ其處に一種の哀れを見出さねばならなかつた。唯願はくは一日も早く郵便局長をして住宅らしき住宅に住まはしめ、同時に鍊光亭をして其本來の面目を保たしめ度いものである。斯く考へつゝある耳元に、

「ガラス障子の問題でつい忘れてゐたが……」と支局長は船が鍊光亭の下を過ぎ去らうとした時に俄に亭下の喉の中腹に在る祠のやうなものを指して斯う言つた。「あれが大洞江祠と言つてゐて、妓生を祭つた祠だといふことです。尤も同じやうな傳説が晉州にもあるとかいふことで何方が本家だか判らない。兎に角其物語りといふのは斯ういふことです。矢張り文祿の役の時行長の部將の某が其思ひもの、桂月香といふ妓生と此の鍊光亭に在

つて江水を眺めてゐた時、妓生は此武將を殺すことが邦家の讎を報ずる一端だと覺悟し、武將の心を許した隙を見て崖下に突落し、自分も亦身を投じて死んだ。時人が其忠節を尊んで祠として祭つたと斯ういふのであつたね、洪さん。

「さういふ傳説もあるが、其に似たことは文祿の役當時に澤山ある。此大同江祠といふのは何か他のものを祭つてゐたのに後人がさういふ口碑をくつゝけたものだらう。」と洪さんは重きを置かぬやうな口吻であつた。余は事實と否とを問はず彼の第一江山の欄下に斯る物語の小祠のあることを寧ろ満足に思つた。大同門は鍊光亭よりも一層高く峙つて雄姿を見せてゐた。其下を過ぎると右岸の人家は漸くにして其屋根の形を變へ、棟にカブを見るのが少くなつた。これは朝鮮町が日本町に移り變

つたことを示すのであつて、此邊はもう新市街であらねばならなかつた。支局長は霧の中に遙に水を隔てた左岸を指して

「あそこが船橋里で大島旅團が牽制運動を試むる爲め幾度も強襲を試みて死傷の多かつたところですよ。」と言つた。數條の楊柳が煙るが如く暮靄の中に隱見して柔かい平和な別個の天地を爲して居た。

「あの楊柳の間に幽かに見えるのが紀念碑です。お見えになりますか。」と支局長は念を推した。成程さう言はれれば紀念碑らしいものが見える。一隻の韓船は今其楊柳の岸を離れて二三の人を乗せ此方に漕ぎ來りつゝある。これ亦平和村の光景である。「あそこは渡場になつてゐるのでですか。」

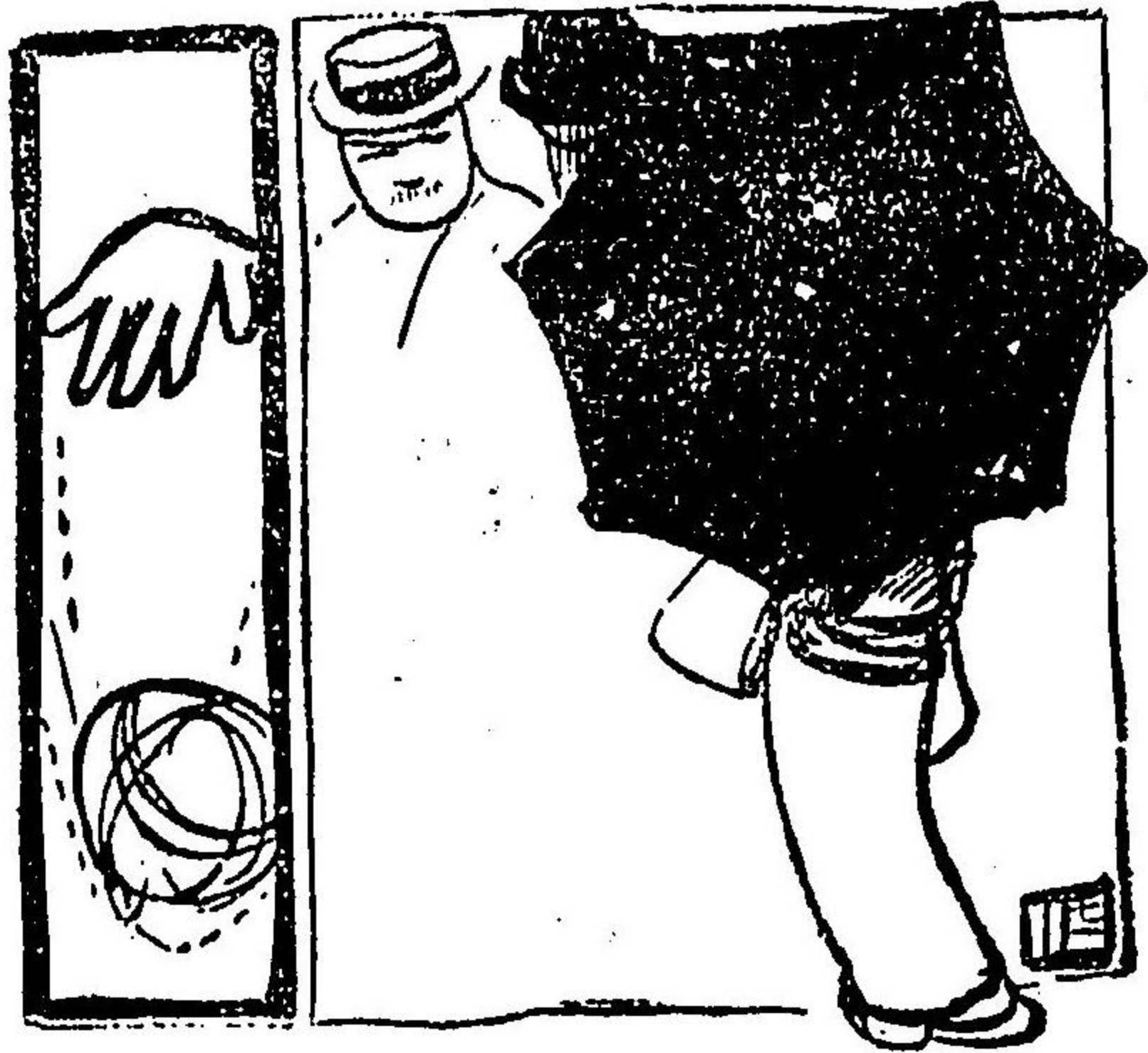
「さうです。」と支局長は答へた。

我等の船も其渡し場の片方の船着場となつて居る税関官舎の横に着いた。船を捨て、江岸に立つた時彼の韓人の船頭は、「私は九曜館にゐるのです。電話がありますからいつでも御用の時は電話を掛けて下さい。私の名ですか岩吉といひます。」と言つた。此日本語の巧みな韓人の岩吉といふ名は彼の時々大きな聲で「はい。」と返辭をするほか日本語を話すことが出来ぬ松屋の韓人の佐々木といふ名程をかしくは思はなつた。

三十三

支局長とは税関の裏で別れ洪さんと三人夕闇の中を宿の方に歸り乍ら斯んな話をした。

「今日は殆ど平壤の周囲を一周したのですな。」



んか。

「其のみではございません。舊市街の商賈の盛な町と船着場の荷の揚げ卸しを御覧になりましたからもうこれで平壤のゼネラル、アイディアを御得になつた譯でございます。もう此上は有名な妓生學校とサンペー位を御覧になれば充分でございます。」と洪さんは笑ひもせずと言つた。「京城にもあつたぢやありませんか。」

「京城にもございましたけれども妓生の本場は平壤でございますから。」

「さうすると風景の點許りて無く美人といふ點から言つても京都ですわね。」

「京都でございますとも其上舊都といふ點から申しましても。」
妻は黙つて二人の話を聞き乍ら跟いて来た。洪さんは氣が着いたやうに、

「奥さん定めてお疲れてございましたませう。城跡だけでもなか／＼の道程でございましたから。」

「いゝへ左程に草臥れたやうにも思ひませぬ。今日は本當にいゝ見物を致しました。京城で金さんの奥さんにいろんなところに御案内して戴きましたけれども今日のやうな心持のいゝ事は

ございませんでした。私あのお牧さんとかいふ方が忘れられませぬわ。」

「全くあの女は變つてゐるわ。あのはつきりした眼と白い齒とはたしかに深い印象を残す。お牧の茶屋は名もいゝな。」

洪さんは薄暗の中に何事かを考へ出さうとする人のやうに暫く黙つてゐたが、

「内地にゐました時に向ふ横町の何とかいふ鞠唄をよく聞いたやうに覚えて居りますが、其中にあるのがお牧の茶屋ではございませんでしたか。」

妻は笑ひ乍ら、
「其はお仙の茶屋でございますませう。」

「お仙の茶屋でございましたか。」と洪さんも笑つた。

「さう／＼そんな鞠唄があるね。どうやらいふのだね。」

「向ふ横町のお荷荷さんへ」といふあの唄でせう。」

「其から先は？」

「厭ですねえ。「一錢あげてさつと拜むてお仙の茶屋へ。」でせう。」

「其から？」

「腰を掛けたら澁茶を出しててせう。もう私厭馬鹿らしい。」と

妻は怒つたやうに言つた。

洪さんはなつかしさに其を聞いてゐたが、

「少し思ひ出しました。「澁茶よこ／＼横目に見たらば」

其調子がをかしいのを余も妻も笑はずに耐へてゐたが、

「それからどうやらでございました。」と洪さんは眞面目だ。

「米の團子か土の團子かてせう。」

「そんなに切れ／＼に言はずに言つて見たらいいだらう。」

「でも馬鹿らしいわ。」と言ひ憎くさうにしながら、「おだんごだ

んど。其だんごを犬に遣らうか。猫にやらうか。とう／＼とん

びがさらアつてッたてせう。」と言つて妻は湖暗の中に腰を屈め

て笑つた。

「其鞠唄を聞きますと私の永く下宿して居りました芝區露月町

の裏露次を思ひ出します。」と言つて洪さんは疎に家の建つてゐる

此殺風景な新開町を眺めた。

「さうですね。鉢巻をした子守子などがよくさういふ鞠唄を詠

つてゐますね。」と余も夏の夕の下町の光景を思ひ浮べた。

お仙の茶屋が話題になつて三人は足の草臥を忘れて歩いてゐ

るとふとした一軒のうちに澤山の朝鮮人が集まつて、一人の日本人が説教のやうなものをしてゐた。軒燈を見ると組合教會といふ四字がガラスの表に赤く書かれてあつた。聞くとも無く聞くと斯んな言葉が耳に入る。そこで社の前に行くつと鈴が下つて居る。鈴といふと皆様御存知でせう馬の此處に下つてゐる……と牧師らしい人は自分の喉のところを示した。すると坐中の鮮人中に飲込めたらしく首を動かすものと更に合點の行かぬらしく牧師の顔を見詰めてゐるものがあつた。耶穌の説教に神社の前の鈴はをかしいと思つてよく見ると牧師の手に持つてゐるのは尋常小學讀本といふ類のものらしく彼は説教をしてゐるので無くて日本語を朝鮮人に教へてゐるのであつた。余は自分が田舎の中學校にゐた頃初めて一人の亞米利加人の宣教師が英語の

教師として俯はれ「ホワット、イズ、ヂス。」と指を一本上げ「ザット、イズ、フインガー。」と生徒に答へさせなどして、少しも日本語を知らぬ彼が苦心慘憺してコンバーションを生徒に教へたことを覚えてゐる。さうして僅に簡単な會話が出来初めてから級中の有志を自宅に集め新約聖書の講義を始めた。余も其一人として列席して講義を聴いてゐると、彼は其聖書の文句を一讀して、其から熱心に講義をはじめた。どんな事を言つたか覚えて居らぬが矢張り此の牧師のやうに神社の前の鈴を馬の喉に在るものとして説明して聞かせたりしたのであらうと思ふ。さうして余等が不得要領なやうな顔をして居ると、「アンダースタンド？」と彼は力のある聲で言つて「ヂット」皆の顔を見る。皆餘を判らぬのを判らぬといふのも氣の毒な様に思つてよい加減に首を振つて置くと、

「怪しい！」といふやうな表情をしてニヤリと笑ひ、即ち眞面目な顔に戻つて大きなため息をつき、氣乗りのせぬ調子で又た次の節に取り掛つた事などを思ひ出した。此牧師も少しも朝鮮語を知らぬのか、地方訛りの多い日本語で諄々として講釋してゐた。「まあ貴方がた。」と此時突然後ろから聲を掛けたものがあるのて驚いて振り返つて見ると、其は紛ふ方なきお筆であつた。

「いつ來た。」と余は驚くより外は無かつた。

「一人て？」

「お筆は笑つてゐて答へ無かつた。」

「宿は？」

「すぐ其處の花屋です。貴方のお宿は？」

「松屋にゐる。」

「洪さんも御一緒？」

「いゝえ私は……」と最前から微笑を含んでお筆を見てゐた洪さんは首を左右に振つた。

「奥さん平壤つて、淋しい厭な處ですわね。まあ此往來はどうでせう。まるで灰！」

「本當ねえ、けれども牡丹臺から大同江の方はそりやいゝ景色ですよ。」

「今日そこへ行らしたの。」

「え。」

「お伴すればよかつたわねえ。」

突然表で斯んな話が始まつたので牧師の引つゞいた講釋を聞

き乍らも朝鮮人等は時々此方を見た。

「まあ明日でも宿に來たまへ。」と余は牧師の迷惑を思ふて其前を立去らうとした。

「まあ其邊まで御一緒に行くわ。」とお筆は妻の傍により添ふて歩いた。

三十四

其翌日の日影が傾いてから又支局長の案内の下に我等夫婦とお筆とは船橋里を見物に出掛けた。洪さんは差支があつて來なかつた。

お筆は昨夜も松屋の前迄來て、

「今晚は此處で失禮しますわ。」と言つて其儘歸り今日も電話で船橋里見物の話をした時、

「お前の宿迄寄つて一緒に行かう。」と言つたら、

「表で待つてるわ。」と笑つて實際支局長等と花屋の前を通り掛つた時、チャンと表に待つてゐた。

税關横に出ると例の大同江の廣い流が眼前に現はれて船橋里の楊柳が對岸に靜まり返つてゐた。昨晚は暮色が大分迫つて來た時分であつたので唯廣々としたなつかしい景色に眺められたが、今日は一々其邊の光景が明に見られた。税關長の官舎は粗末な木造の洋館であつたが一部分板をはがして修繕をして居るのが汚く見えた。其横をだら／＼と川に降りると、其處の砂原に二三の朝鮮人がうろ／＼してゐた。其は皆船頭らしく、支局長と談

判の下に其中の一人が其處に繋いであつた一つの韓船に乗つて面白くそりくり返つてゐる其舢を砂の上に乗り上げる様にしたので我等四人は乗り移つた。

支局長の朝鮮語は叱咤するやうな聲でよく「タンシン」といふ言葉を使ふのが耳にとまつた。其他「オブソ」とか「チョッソ」とかいふ言葉も屢々使はれた。察するところ其語数は極めて少數かと思はれたが、其で船頭には旨く意味が通ずるらしく命令は直ちに行はれた。

船頭は日本の船と楳との合の子のやうなものを艦の方に兩脚を広げて突立つた儘で巧みに操るのであつた。船頭の顔は眼の釣り上つた鼻の高い堂々たる顔で其長大な體を稍々高くなつてゐる艦に突立てた處は立派であつた。殊に其頭の上の烏帽子は

品位を添へた。

大同江の水は昨日も今日も變りは無く汪洋として流れてゐた。船が中流に出た頃返つて見ると、税關官舎は其板を外した汚いあとともう目に入らず、唯小さい建物として眺められ上流に當つて例の大同門鍊光亭の大きな屋根が群小を壓して江水の上に聳えてゐた。

「どうだい、景色だらう。」と余はお筆に言つた。

「いゝ景色だわ。」とお筆は答へた。けれどもお筆の心は此好風景の爲めに動かされたやうには見えなかつた。余は心の中で矢張り深川とかいふ彼の待合の蠟燭の火影の方が彼には意味深く映るのであらうとをかくし思つた。其に反して妻は本當にいゝ景色ですわね。」と同じ言葉を何度となく繰り返して心から此の

江山の眺めに憧れてゐるらしく、殊に上流の牡丹臺下の彼のお牧の茶屋に屢々其の心は通ふものゝ如く見えた。

「斯んな淋しい景色の處よりも昨日洪さんの言つたサンペーにても案内して貰つた方がお前は面白かつたらう。」と余は笑ひ乍ら言つた。お筆は、

「全くだわ。」と言つて澄ましてゐた。

「それでは歸りに御案内せうかな。」と支局長はお筆の美くしいあばずれた顔を珍らしげに見乍ら微笑して言つた。

向ふから我等の乗つてゐるのと同じやうな一隻の船が同じやうな船頭に操られ乍ら此方に来て我等の船と磨れ違はうとした。見ると向ふの船には頭を散髪にして烏打帽を被つてゐる兩班の子弟らしいものが唯一人乗つてゐた。支局長は無造作に聲を掛

けて例の如く「タンシン……」何とか言つてものを尋ねてゐるやうに見えたが、其青年は青白い美しくしい顔を此方に向けて二三言答へた許りで、すぐ脇を向いてしまつた。二隻の船は互に浪を切つて別れた。

「夜學校に日本語の稽古に行くんださうです。」と支局長は言つた。余は昨夜の組合教會の光景を思ひ出した。

「夜學校といふのは組合教會ですか。」

「あそこでも遣つてゐました。まだ他にも澤山あります。」と支局長は答へた。

船は漸く對岸に着いて、碇の稍々江に突出して岬の如きものを爲してゐる處に例のそつくり返つてゐる長い舳を乗り上げるや

うにした。

四人はいつか楊柳の下に立つた。此の楊柳は對岸からも江の上下からも、いつも船橋里の目標の如く眺められたところのもので同時に其柔かいまん丸こい木の形が常に静かな穏かな感じを人に與へた。今親しく其木の下に立つても此心持に變るところは無かつた。

「おや。」とお筆は驚いたやうにして後ろを顧みた。見ると矢張り楊柳に似たやうな柔かい感じのする草とも木ともつかぬもの茂つたとある籬の中から一人の男が一個の水桶のやうなものを日本風に肩に荷つて現はれたのであつた。

「びつくりしたわ。」とお筆は清涼里で春尾緑水の柩に出逢つた時と同じやうにひしと傍に寄り添ふやうにして余の手を握つた。

妻は知らないのか知つて知らぬ風を装うてゐるのか黙つて其男の行衛を見守つてゐた。男はだら／＼と磧に下りて水桶の片方づゝをかへすやうにして水を抄ひ上げ今度は重さうに其を擔ひ乍らもとの籬の中に這入つて行つた。

「日本人だらうか。」余はお筆の手を振り拂ふやうにして言つた。「朝鮮人よ。」とお筆も素直に手を離し乍ら言つた。

「あれは此奥に在る葡萄園に灌溉するのです、もう何十日と言つて雨が無いですからな。」と支局長は先に立つて我等を案内し乍ら言つた。

彼の船中から楊柳の間に見えた記念碑は他でもよく見るやうに砲彈を垣にして「嗚呼大島旅團……」云々といふ大きな文字の彫られた石碑が大空に聳えてゐた。全體が柔かい曲線のみで出来

てゐる此邊に在つて此紀念碑のみは際立つて硬い感じを與へた。大島旅團が此處に來た時、清兵はあの練光亭で盛に支那樂を奏して餘裕を示してゐたさうです。而も其が八月の十五夜で名月の夜であつたといふのだから詩的ですね。其上當時從軍した人の話によると、牡丹臺からかけて對岸一帶には所謂旌旗堂々といふるんな旗指物を翻して軍容を壯にしてゐる、まるで三國志などを讀んでゐるやうな光景であつたといふ事です。と支局長は又得意の戰爭談を始めた。

「又來たわ。」とお筆は身を避けるやうにして又桶を擔つてゐる一人の男を遣り過ぎました。彼女は支局長の戰爭談には耳を傾けやうともせず、いつか又夕靄の漂ひ始めた四邊の光景を氣味悪さうに眺めてゐた。

此紀念碑を取圍んだ草原の後ろはすぐ葡萄園であつた。灌漑する男は他に尙ほ二三人もあつて、彼等は廣々とした其葡萄園一體は大同江の水を灌ぐのであつた。よく見ると其男は日本人もあり朝鮮人もあつた。

「園主は日本人ですか。」

「さうです。」

「此廣い園に毎晩水を遣るのは大變ですね。」

「葉樹も之に困りますね。」と支局長は經驗あるらしく云つた。

「まあ一寸來て御覽なさい。澤山生つてますわ。」と妻は嬉しうに聲を出して呼んだ。夕影、漂うてゐる黒ずんだ曲線の中に四人が顔を寄せて見ると房々とした小粒の順が累々として垂れ下つてゐた。

支局長は勝手に其葡萄園の中の徑を歩き廻り乍ら、

「もう降らんと困るなあ。」と其桶を擔つた一人の男に聲を掛けたりしてゐた。妻は或は孕んだ女の乳房のやうに豊かに稔つて紫が、つた色に染まつてゐるものや、或はまだ蔓より産れ出た許りの卵のやうな小さく青いものや、其々を興あり氣に眺て支局長のあとに跟いて行つた。だん／＼と暮色の迫つて來る光景は昨日の打晴れたお牧の茶屋とは趣を異にして暗は其の茂つた葡萄の葉陰、此の灌溉する人の足許などに恰も心ある活物であるかの如く附き纏うて、大空に漂ふ薄い影よりは遙に黒く大地の上を彷徨うてゐた。お筆は益々是等の景色に興味を感ぜぬらしく、恰も疲れ果てた人のやうに大分後ろに後れてとぼ／＼と跟いて來て

ゐたが、妻と余との距離の稍と離れたのを見て俄につか／＼と余に追ひ着いて耳許に口を寄せ囁くやうに言つた。

「私兄さんのあとを追うて來たの。」

「えい？」と余は驚いてお筆の顔を見同時に妻に氣兼ねして其後ろ影を見た。一尺と離れてゐないお筆の白い顔にも薄い一刷毛の間は掛つてゐたが其目には曾て蠟燭の火影に見た覺えのある媚の色が漲つて居り、妻の後ろ影は例の活物の暗が葡萄の茂りの中に一緒に包み込まうとしてゐる如くぼんやりと黒ずんでゐた。

「いけなくつて？」とお筆は又甘えるやうに言つた。

「馬鹿な。」と余は叱るやうに言つて、花屋に一緒にゐるのは誰だ

ら。」と聞いて見た。

「誰もゐやしないわ。」とお筆は笑つて、「私一人？。さう初めから

言つてしまふと奥さんに悪いと思つて。

支局長と妻とが立留つて我等を待つてゐる如く見えたので二人は此以上を話さなかつた。

葡萄牙を出て再び磯に立つた時はまだ暮残つて居る薄明りが水の上だけを這うてゐた。其處らに繋である船の中に我等を待つてゐる先の船頭も臆氣乍ら認められた。

「二つ石を投げさせて見ませうか。」と支局長は突然思ひ立つたやうに今其磯に腰を下ろしてゐる一人のチゲに例の「タンシン」といふ言葉を使つて命令した。けれどもチゲはニヤ／＼笑ひ乍ら首を振つて承知しなかつた。よく見ると此チゲはいかにも弱々しく手足を動かさへ懶さうであつた。

「此奴一日か二日食はないんだな。」と支局長は笑つた。斯うい

ふ類の労働者にさういふ場合のあることは余も曾て聞いたことがあつた。支局長の想像が當つて居るかどうかは知らぬが彼は唯長い煙管を啣へてぼんやりと水上を眺めてゐた。

「やつぱり人だつたわ。」と最前から稍々下流の水面を見詰めてゐた妻は幽かに笑ひ乍ら言つた。これは水浴をしてゐたらしい二三人の韓人が頭より肩胸といふ風に漸々に其體を現はして磯の方に上つて來たのであつた。其が唯薄明りの水面の上に黒い人間の形をした輪廓として見えた。

船頭が舟を寄せたので四人は又乗り込んだ。透明な空に夕星の光も静まり返つてゐた。對岸の人家は黒い形が參差として大同門鍊光亭のあたりを中心にして燈火がちらついた。支局長は何事かを船頭と話した。船頭は前の如く小高い艦に突立つて例の繚

とも襦ともつかぬものを操つてゐたが、其黒い影が一層丈高く見えた。

余は初めうつかりしてゐたが、中流を過ぎた頃になつて船は税關官舎あたりよりも大分上手に上つてゐることに氣がついた。

「もとの所には着けないですか。」と余は怪み乍ら聞いた。

大同門の横に着けさせませう。あの邊の夜景も一度は見て置く價值がありますから。」と支局長は萬事を飲込み顔に答へた。

筆の横顔の額から鼻に連なる美しくしい曲線がすぐ余の眼の前に在つた。

三十五

大同門の横手に舟を着けた頃はもう水と陸との區別なくすつかり暮れてしまつてゐた。四人は舟を見棄て、朝鮮人の店と日本人の店との入り亂れてある繁華な町を通つた。

「こゝが大同門通りです、洪さんのよく來るうちは此近處だと思ふが……」と支局長は獨り言のやうに言つて心當てに一二軒を聞合はせてゐたが判らぬらしかつた。京城の鐘路通りで見たやうな笠籠のやうな提灯を提げた車夫がこゝにも見られた。

「あの提灯を一つ買ひませう。」と支局長はとある韓人店の軒先にある一個を買つて其に灯をともして先に立つた。其時向ふからひよつくら來合せたのは洪さんであつた。

「御見物でございますか。」と洪さんの方から言葉を掛けた。

「此邊だらうと思つて今君の宿を探してゐたところだ。どうだ

一緒に散歩しないか。

「今日は俄に用事が出来て今朝から奔走してゐる。松田の法律事務所にも二度行つたが松屋へは寄る間が無かつた。……其提灯を提げて歩くのは朝鮮では下人のすることだ。此の下人さへ居れば此邊の案内は充分だらうから僕は失敬する。」と洪さんは戯談を言つて急いで別れた。

「洪の野郎失敬なことをいふ。」と支局長は提灯を提げた儘洪さんのあとを見送つて苦笑した。さうして大同門通りと直角をしてゐる一つの賑かな町に這入つた。今洪さんの言つた下人といふ言葉が思ひ出されて其提灯を提げてゐる支局長の後ろ姿が唯をかしく眺められた。

支局長は此邊の地理は委しいらしく忽ち小さい路次のやうな

所に這入つて行つた。京城でも余は水標橋の近處の同じやうなところに案内された覚えがあるので、もう大方は推量してゐたが今更厭だと言つて引還すわけにも行かず唯黙つて跟いて行つた。路次は突當つてもう其處が行詰りかと思ふと軒下のやうな狭い濶突の間を抜けて又別の小さい路次に出た。

「何處へ行くんです。」と妻は不審の眉を寄せた。

「支局長がお筆にサンペーを見せやうといふのだらう。」と余は笑ひ乍ら答へた。

「まあ。」と妻は當惑したやうに言つたけれども支局長の手前を思つて、あちら其以上を言はず、澁々あとに跟いて来た。其に反してお筆の方は先きに葡萄園に在つた時とは別人かと思はれるやうに生き生きとした顔付をして足の運びも軽さうであつた。

人いされのした空気が瓦斯の多い燈火の光とは彼に勇氣を吹込
むのであつた。

忽ちとある路次に出ると俄に人の心をそゝるやうな夢見るや
うな唄が聞こえ始めた。其は一人の聲でなく女性的な柔かい合
唱であつた。何處かて一度聞いたことのあるやうな唄の調子だ
と思つたのは彼の朝鮮料理屋で素淡等の謠つた勸酒歌の節によ
く似てゐるのであつた。

「あれは何ですか。」と余は聞耳を立てた。支局長は昨日牡丹臺
の跡に立つて當時の戦況を語つた時と同じやうに稍々得意氣
に舌なめづりをしてから、

「客を呼ぶ唄ですな。日本で言へば牛太郎の處を此方はサンペ
自身か斯く唄を歌つて客を呼んでゐるのです。」と言つた。其

聲には何處となく悲しい調子もあつて賤しい心持は微塵も起ら
なかつた。

近よつて見ると或家の表に床几のやうなものを置いて其處に
三人の若い女が並んで腰を掛けて其唄を歌つてゐるので、三人と
も一見妓生と變らぬやうな服装をしてゐた。さうして其前を通
り過ぎやうとすると忽ち明るい火影が我等の形を仰山に照し出
して門内にもけばくしい服装をした一人の女が立つてゐた。

「這入つて見ませう。」と支局長は先づ門をくゞつた。妻が躊躇
してゐるうちにお筆はすぐ其あとに跟いて這入つた。此場合夫
婦て表に立止るといふ事は荷人目に立つので二人とも亦止むを
得ず其あとに續いた。

見ると支局長は早一人の女に其提灯を持つた方の手首を掴ま

へられてゐた。支局長は例の如く「ダンシン……」何とか言つて其手を高く上げて振り拂はうとしたが女はなか／＼離さなかつた。唯双方の手が争ふ度に提灯が不規則に動いて動ともすれば火が紙を焼かうとした。其容子がをかしかつたので門内に四五歩進んだ許りで内部の容子を恐る／＼伺つてゐた妻も余も覺えず笑つた。

門の入口は廣くも無かつたが内部に這入ると三つか四つの部屋が少し許りの庭を隔て、離れ／＼に在つて其處に一つ宛彼の素淡の宿で見たやうな兵餘の金具の澤山に着いてゐる箆筒が置かれ其を背景にして燈火を負ふた女が此方を見てゐる。支局長の手首を取つた女も其一つの部屋から網に掛つた兎を覗ふやうに走り寄つて來たのであつたが第二の女は續いて這入つたのが

お筆であつたのを見て縁から腰を浮かせた儘躊躇して此方を見てゐた。

「貴方どうなすつたの。確りなさいよ。」とお筆は後ろから支局長の背中を叩き、美しくいわねえ此人。」と其女の顔を正面に見た。「私美人でせう。」と其女は日本語を使つて戯談のやうに聲高く笑つたが、いつかお筆に氣壓されて支局長の手をゆるめてゐた。

「奥さんものと此方へいらつしやいませ。」と其女などは眼中に無いやうに此方を振り返つたお筆の顔は勇者のやうに輝いてゐた。

「私いや。歸りませうよ。」と妻は低い聲で余を促した。余は尙暫く容子を見やうと思つて元の位置に立つた儘妻の言葉に従は無かつた。

女はもう支局長の手を離してゐたが提灯の灯はいつの間にか消えてゐた。支局長は何とか言つて女を擲ぐるやうな料をする。と女は笑ひ乍ら自分の部屋に歸つてマツチを持つて來た。女の擦つたマツチは二度共風に吹き消された。お筆が女の手から奪ひ取るやうにして擦つた火は巧みに蠟燭に移された。蠟燭の裸火は其女の正面と支局長とお筆との横顔とを明に照し出し女の顔の廣い額に光澤の無い下等な白粉の塗られてゐることや其口許の手持無沙汰に淋しく引締つてゐることやお筆の顔の勝誇つたらしい鮮かな表情やを描き出した。

二人連の遊蕩子らしい若い朝鮮人は我等にぶつつかりさうに歩き乍ら這入つて來た。奥の部屋にゐた二人の女は争ふやうにして出迎へて庭に立つた儘喋り合つた。二人の朝鮮人は時々振

り返つてお筆を見た。お筆は其に頓着無く支局長の手から受取つた巻煙草入れから自分も一本の巻煙草を取り一本を女に取らせ女の擦つて進めたマツチの火を靜かに其煙草に移した。

又た一人の朝鮮人は酔うてゐるらしい足取をし乍ら不思議さうに余等夫婦を見乍ら這入つて來た。自ら巻煙草に火を移しつゝあつた女は晴れやかな顔をして此男に何とか言つた。醉漢は怒りを含んだやうな目附をして支局長とお筆とを見たが何とも言はなかつた。

「もうそろ／＼行かう。」と余はお筆に聲を掛けた。さうして恐ろしげに余の袖を引く妻と共に先づ門を出た。

表の床几に腰を並べてゐる女は嘲るやうに我等を目送り乍ら其ても彼の哀調を帯びた合唱は止めなかつた。一女の手から他

の手に、其手から又他の手にと渡されつゝあるものは煙の出てる一本のパイプであつた。

やがて支局長と共に後ろから我等に追いついたお筆の顔には、「卑怯だ。」と人を嘲るやうな色が浮んでゐた。さうして例の沼のやうに静かな大きな眼はぢつと余の顔を見据ゑた。

其からも同じやうな路次を縫ふやうに歩いて、同じやうな合唱を聞いたり、同じやうなぞめき歩きの朝鮮人に出逢つたりしつゝ、お筆は水の中に在る魚のやうに、獨り元氣よく興に乗つてゐたが、妻は其に反して唯疲勞を訴へるやうな顔附きをしつゝ、澁々ついて來た。お筆が眞先に立つてとある狭い路次に這入つた時、あとに後れてゐた支局長は、

「其處は行詰りかも知れ無い。」と云ひ乍ら跟いて來た。けれども其は行詰りては無かつた。其狭い路次は更に三條の狭い路次になつてゐるので、お筆と余とは濶突に袖を擦らぬやうにと用心しつゝ、比較的廣い中の一つに身を窄めて這入つて行つたが、支局長と妻とは稍々後れて跟いて來た。其時お筆は小さい聲で、

「兄さん今晚遊びにいらつしやいな。」と振り返りもせずと言つた。余が黙つて答へずにあると、

「ねえ一寸御相談があるのよ。」と重ねて言つた。

「今晚といふ譯にも行かないが、一けれども全體何の相談？」

此前の相談なんかも要領を得なかつたせゝと余は冷笑するやうに言つた。

「厭ならいゝわ。」と拗ねたやうに言つて考へがあるから。」

「失敬な奴が己を脅迫しやあがる。」と余は心の中へ憤つたが兎に角妻を後ろに控へてゐる爲めに何事も言はぬことにした。漸く広い路に出た時支局長は、

「奥さんもお疲れのやうですから歸りませうか。」と言つた。余は早速賛成した。四人がヨボの車に分乗する時ふと行き逢つたお筆の眼は蛾を導く火のやうに燃えてゐた。

三十六

余が花屋の門をくゞる機會に到着したのは二三日後の事であつた。妻のところには金夫人からの紹介があつたとかで某夫人が態々訪問して來た。其間に余は一度は訪問せうと思つてゐた

松田の事務所を訪ふたが生憎不在であつたので遂に其足で花屋を訪ふ事にした。



くまいとも考へたが此儘に放擲して置くことも何となく不安心に覺えて一度は行くことに決心したのであつた。

サンペー探検後お筆からは二度電話が掛つて來た。二度共余を電話口に呼び出して、
「一寸位來て下すつてもよさうなものだわ。」と怨ずるやうに言つた。殊に一度などは、
「兄さんも随分奥さん孝行ね。」と嘲るやうに言つた。余は斷じて行

「奈が女中に導かれて其室に通つた時、お筆はクス／＼と笑ひ乍ら次の室から出て来た。見ると頭は櫛巻きにして白粉のあとも無く、着物も寝巻らしい、絹物ではあるが古びたものを着てゐた。其姿がなまじひに艶に見えた。」

「御免なさいよ、兄さん。こんな風をしてゐて。」

「どうかしたの。」

「え、少し加減が悪いの。戀煩ひよ。」と一寸余の顔を偷見るやうに見て笑つた。

「大分此間うちから人を脅迫するね。僕は其程後ろめたい事も無い積りだが……と余は戯談のやうに言ひ乍ら私に今日の結果を氣遣つた。」

「随分ねえ脅迫なんて。」とお筆は怒つたやうに言つて、兄さんの

あとを追つて来たのがそんなに脅迫なの。」

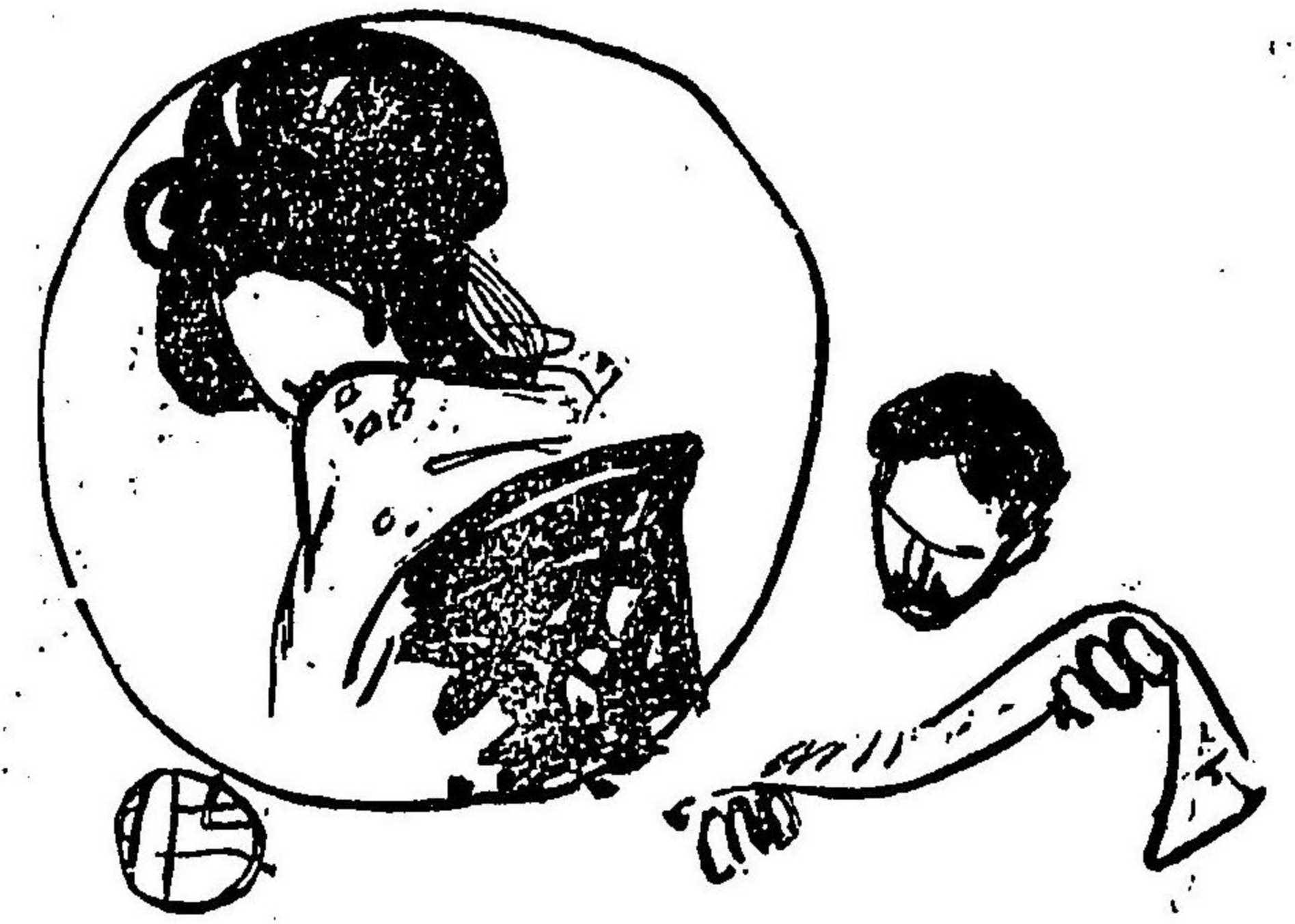
「其はお前の勝手て僕の知つたことぢや無いさ。けれども全體僕のとを追つて来てどうするといふの？」

「どうするといふのでも無いわ。」とお筆は殆ど意味を爲さぬことを言つて其目には美しく白い玉を浮べた。蠟燭の火影に人を翻弄したり、サンペーの前に意氣を示したやうな面影は無く、恰も年の行かぬ初心な小娘のやうな素振をして唯俯向いてゐた。

「判らぬぢや無いか。」と余は其しら／＼しい嬌態を心で憎みつゝ空嘯いて室内を見廻した。荒れ古びた壘の上に新らしい粗末な煙草盆の置かれたのや、床の間の石版刷の掛地に古めかしい佛の置物などが殊に不愉快に目に映つた。

お筆は黙つて怨むが如き眼なざしをして一寸余の胸の邊を見

て其瞳に光るものを強ひて人の目に留めやうと苦心するらしかつた。余も暫く何も言はずに彼女の口を開くのを待つてゐた。女中は茶と菓子とを運んで来た。さうして此場の容子に好奇の目を瞞つて見ぬ振りをして乍らお筆の顔を偷見るやうにした。お筆は其を避けやうとせず態と其女中の方を振り返つて水菓子の美しいのを。と言つた。いつもの通りの大きな眼に涙は其周囲の瞳を濡して黒い瞳をも心地よく濕してゐた。女中はしげしげと其目を見て、かへす刀に余の顔をも瞥見して退却した。余は其眼をいつもの通り美しくいとは思つたが其涙に動かされうとはしなかつた。人を動かすには其涙は餘りに乏しかつた。お筆自身が愛情する程に他人には貴いものでは無かつた。余はふと斯ういふ話を思ひ出した。一人の遊女が春雨の日の



つた。心から誰を待つ事も出来ぬ遊女は自分から自分を欺いて

徒然に兼て自分に思を運んでゐる一人の男に手紙を送つた。女は別に其男に心を許してゐるといふても無かつたが唯逢ふ迄は何となく樂しかつた。自分は其男が障子を開けて自分の部屋に這入つて来た時何と言つて泣かうかと考へた。自分自身に自分を欺いて心より其男に持焦れてゐる女の心持になり終せて忽ち其處に泣き倒れて見度いと思つた。と唯斯ういふ話であ

纒に初心な涙を流すところに果敢ない興味があるのであつた。
お筆が其乏しい涙を自ら愛惜して女中に迄誇り示す心持が余には餘り明白に讀め過ぎた。

八八三

「なんて兄さんはさう邪見なんてせう。」と女は又自ら涙を呼ばうとしたが其はもう無駄であつた。

「僕は邪見なのではないよ。」と言つて余は微笑した。さうして心のうちで邪見といふのはまだ熱情があるのである。余のは冷淡なのだと思つた。

「邪見だわ。人の心も知らないで。」

「お前の心はよく判つてるよ。」

「ぢやあ何故も少し優しくはして下さらないの。」

「……………」

「あとを追つて來たのが悪かつて？」

「お前は満洲に行くんだつてね。」と余はお京に聞いたことを思ひ出した。

「そんな事誰に聞いて。」

「……………」

「朝鮮ではもう誰も相手にして呉れないんですもの。」と彼は又情ありげに言つたが、其目はもう乾き切つてゐた。辨天小僧は鬚を崩して裾をまくるのであるが、此はもう初心な真似に草臥れて心の鬚を脱ぎ棄てたといふ形であつた。さうして忽ち投げ出すやうに。

「兄さんも随分野暮ね。情人なんか出来る人ぢや無いわ。」
今になつて判つたの。お前らしくも無い。

九八三

「だつて餘りだわ。も少し何とか曲がありさうなものに。深川の時なんか此程とは思はなかつた。」と折柄水菓子を持つて来た女中に「ビールは無くつて。」

「エビスならあります。」

「持つて来て頂戴。」

「又ビールか。」と殆ど口へ出さうとしたのを推し黙つて、ポロポロする菓子を舌の上に乗せて苦い奴をせうことなしにガブくと飲んだ。當夜の事が思ひ出された。此女とももういゝ加減の都合で御免を蒙り度いをつくづく思つた。

「矢張僕の跡を追つて来た事になるのかね。」

「まあさうして置いて頂戴。」

「南山樓の方は……」

「一寸兄さんに相談があるといふ事にしたの。」

余は石橋を思ひ出した。何といふ事も無く自ら石橋になすりつけられた形になつてゐることを腹立たしく思つた。

「石橋からは僕の出發たあとにも便りは無かつたかね。」

「えい。」

「南山樓では何と言つてる。」

「石橋さんの事だからと言つて安心してるわ。」

「其てはお前の食費のやうなものも其儘になつてゐるのだね。」

「えい。」

「満洲に行く費用は？」

「どうかなるわ。」と事もなげに言つて傷のある林檎の赤い肌を腰の上迄垂らしつゝ、庖丁の手を動かしてゐた。女中の持つて來

たビールがコップに注がれた。

「兄さん私のこちらに來たのが本當にお邪魔？」とお筆の眼は又多少の光を帯びて來た。

「邪魔といふても無いが手を握つたり耳打ちをしたりすることだけ止めて貰ひ度いね。」

「だつて淋しいんだもの。」と自分で自分の身を持って餘したやうに言ふ。

「さうすると僕がいゝ玩弄物になるわけだね。」

「さうでもないわ。」とお筆は打消すやうに言つた。けれども其顔は曇つてはゐなかつた。

「意氣地の無い所を見込まれたといふ譯だね。」と余は又苦笑を禁じ得なかつた。

「そんなに怖がらなくつてもいいわ。取つて食はうとも言やし
まひし。」

「細君の手前もあるからな。」と余は嘆息するやうに言つた。

「奥さんの手前へえ！」とお筆は呆れたやうに言つて「まあそんなもの？」

「まあそんなものとは？」

「私判らないんですもの奥さんといふのが。」

「厄介な女だな。」と余はつくづく此美くしい女を厭はしく思つた。「僕は奥さんのお供で朝鮮漫遊に來た譯なのだから實はお前に構つてゐる間なんか無いんだよ。もういゝ加減に解放して貰ひ度いな。」

「解放つて何。」

「御免を蒙り度い」といふ事さ。」と余は覺えず又嘆聲を洩らした。氣の弱い方」とお筆は嘲り氣味に笑つて、ぢやあ解放して上げてよ。其代り今日は飲みませうね、お別れだわ。」

余は黙つて唯苦い顔をしてゐた。よい加減に話を切り上げて歸ることは容易であつたけれども、尙ほ彼女が余に對して求むるところのものが決局何物であるかといふ事を一層明白に諒解して置き度い様な心持がして暫く腰を落附けてゐた。

「ビールでは駄目ね、酔へないわ。」と大分もう顔を染めてゐながらお筆は腹立たしげに言つて手を打つた。

飲み交ぜたらよく無からうぜ。」と余は清涼里の尼寺に於ける藥酒の惡酔を思ひ出した。

「いゝわ私の體だもの。」と彼女は酔の力を借りて再び最前の初

心な心の状態に立戻つて見やうと苦心するらしく、物に拗ねたらしい素振りをして見せた。果して乏しい露の玉の再び其睫に宿るのが見えた。

「お呼びになりましたか。」と女中は顔を出した。

「御酒をね、お肴は見計らつて。」とお筆は斯く命じ乍らも其物に拗ねた悲しげな表情は崩さぬやうにと力めるらしく、睫の露の玉も尙ほしらくと輝いてゐた。

余の心の其涙の爲めに動かぬことは前と異らなかつた。殊に一度ザツクパランの其本性を現はして置き乍ら尙又同じ事をくり返す其俳優染みた表情に感動を興へる力のありやうが無かつた。けれども其本性を暴露し乍らも尙ほ斯る事を繰り返すことによつて果敢無い興味を呼ばうとする此氣遣ひ染みた女を多少

好奇の目を以て見ぬても無かつた。

やがて日本酒が運ばれてお筆は殆ど一人て飲んだ。古びた絹の着物を引締めたやうに着てゐる肩のあたりから小高くなつてゐる乳の邊にかけて暖かい大きな呼吸が見えた。

「兄さん飲らないの？」

「飲んでゐるよ。」

「さあ注ぐわ。」と余がしぶく盃をあける迄銚子を取上げた儘ぢつと人の顔を見た。今は殊更らに装ふても無く其長い瞳も黒い瞳も曉の葎のやうに心地よげに濕うてゐて其奥には人に迫るやうな恐ろしげな光があつた。

「僕の方はいゝ加減にして置いてくれ。」と余は注がれた盃を下

に置いて頭の中に於けるビールと日本酒との戦ふやうな渦巻きを自覚した。

「厭、私許して上げ無いから、」と笑つて、これからあの何處とかへ連れてつて下さいな。牡丹臺の何とかいふ茶屋へ。あなたあの奥さんが……と奥さんといふ言葉を勉めて言ひにくさうに言つてニヤ／＼笑ひ乍ら其處の女が大變美しくしてつて偉いんだつて讚めてたわ。私其奥さんの讚めてた女が見たいの。」

「あれは全くえらい女らしい。美しくさはお前とどちらとも言ひ兼ねるがね。」

「まあさうどちらが美しいか比べて來ませうよ。ねえ兄さん、連れてつて頂戴。」

「馬鹿言つてらあ。いくら平壤だつて晝日中酔つばらつた女を